

二日市イシバチ遺跡

－野々市町営住宅等建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

2011

石川県野々市町教育委員会

二日市イシバチ遺跡

－野々市町町営住宅等建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

2011

石川県野々市町教育委員会

例　　言

1 本書は、二日市イシバチ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 遺跡の所在地は石川県石川郡野々市町字二日市町地内である。

3 調査原因は野々市町町営住宅等建設に伴うものである。

4 調査は、野々市町産業建設部の依頼を受けて野々市町教育委員会が行った。

5 現地調査は平成22年度に実施した。面積・期間・担当者は以下のとおりである。

期　間　　平成22年10月29日～平成22年12月2日

面　積　　436 m²

担当者　　徳野裕子　野々市町教育委員会　主査

6 出土品の整理は平成22年度に野々市町教育委員会が行い、出土品整理作業は野村祥子、大杉幸江が行った。

7 本書の執筆編集及び遺物の写真撮影は徳野裕子が行った。

8 本書についての凡例は以下のとおりである。

(1) 遺構・地図等の方位は全て真北を表示する。

(2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。

(3) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

(4) 出土遺物番号は、本文・観察表・写真に対応する。

(5) 土層図の注記、遺物観察表の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。

(6) 遺構名の略号は以下のとおりである。

　　掘立柱建物(SB)、堅穴状遺構(SI)、溝(SD)、井戸(SE)、小穴(P)

9 調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括で保存・管理している。

目 次

第1章 経 過

第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理作業の経過	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	5
第2節 層 序	5
第3節 遺 構	9
第4節 遺 物	21

遺物観察表	27
-------	----

第4章 総 括	29
---------	----

写真図版

第1章 経過

第1節 調査の経過

本書に収録の二日市イシバチ遺跡は野々市町字二日市町地内に位置する。昭和61年(1986)より実施の御経塚地区画整理事業に先立ち行われた分布確認調査により、区画整理施行区域内における遺跡の分布は確認できていたが、以南の遺跡範囲は確認できていなかった。その後平成11年度(1999)に北西部土地区画整理事業施行に伴う分布確認調査を行い、確認できていなかった二日市イシバチ遺跡の範囲を確定するに至っている。

当遺跡は保育園、児童館などの子育て支援施設や町営住宅の建設事業を調査原因とする。施設の建設予定地のほとんどは、埋蔵文化財包蔵地外であるか、北西部土地区画整理事業を調査原因として埋蔵文化財調査済となっている箇所にあたり、そのうち町営住宅建設予定地周辺については一部に未調査箇所があることが判明した。町教育委員会文化振興課と町産業建設部建設課との協議・調整の結果、未調査部分のうち地下遺構に影響を及ぼす町営住宅建物建築部分について発掘調査を行うこととし、建設工事の工程上平成22年度(2010)に調査を行うこととなった。

その後石川県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの手続きを行い、平成22年7月30日に県からの承認を得た。承認を得た後、建設課と文化振興課との間で発掘調査の具体的な協議を重ね、同年8月12日、産業建設部からの依頼を受け、8月19日に調査を実施する旨の回答を提出した。同年8月31日付けで発掘調査実施計画書を町産業建設部長宛に提出している。

第2節 発掘作業の経過

作業は平成22年10月29日より開始した。最初は大型重機による遺構面までの掘削より開始し、掘削は11月5日に終了した。同月8日には作業員による人力作業を開始し、同時に外部委託によるグリッド測量も行った。初日は調査区周辺の草刈り、壁削りを行い、同月12・13日に面積の2/3の遺構検出作業を行い、弥生時代の竪穴建物や中世の井戸や溝、竪穴状遺構などを確認した。同月17日には残りの遺構検出作業を行い、中世の掘立柱建物を確認した。井戸は2基確認され、半切で掘削を進めたが、深く危険なため完掘を途中で断念し、残りの半分も掘削可能な深さに留めた。掘立柱建物については、調査中の平面図で確認した時点では2棟の認識でしたが、発掘調査終了後の精査で建物跡は7棟であったことが分かった。その他のピット等も半切で掘削し、土色の注記を行い続いて完掘を行った。冬季であったため、荒天により作業ができないこともあったが、面積が狭小で一部を除いては比較的水はけも良かったので排水作業に手間取ることもなく順調に作業は進んだ。同月30日には掘削作業を終了し、翌日より調査区内の清掃に取り掛かった。12月2日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施し、同日に調査機材等の洗浄、搬出作業を終えて、現地調査を終了した。

【調査体制】

調査主体 野々市町教育委員会(教育長 村上 維喜)

担当課 野々市町教育委員会文化振興課(課長 山下 真弓)

調査期間 平成22年10月29日～平成22年12月2日

担当 德野裕子(野々市町教育委員会文化振興課 主査)

作業 泉谷寿人、今村正男、井村外喜子、高橋信成、

田中万喜子、田村和夫、出村外茂治、藤部純子、

永田芳子、水上孝一、村上姫、山本 博



第3節 整理作業の経過

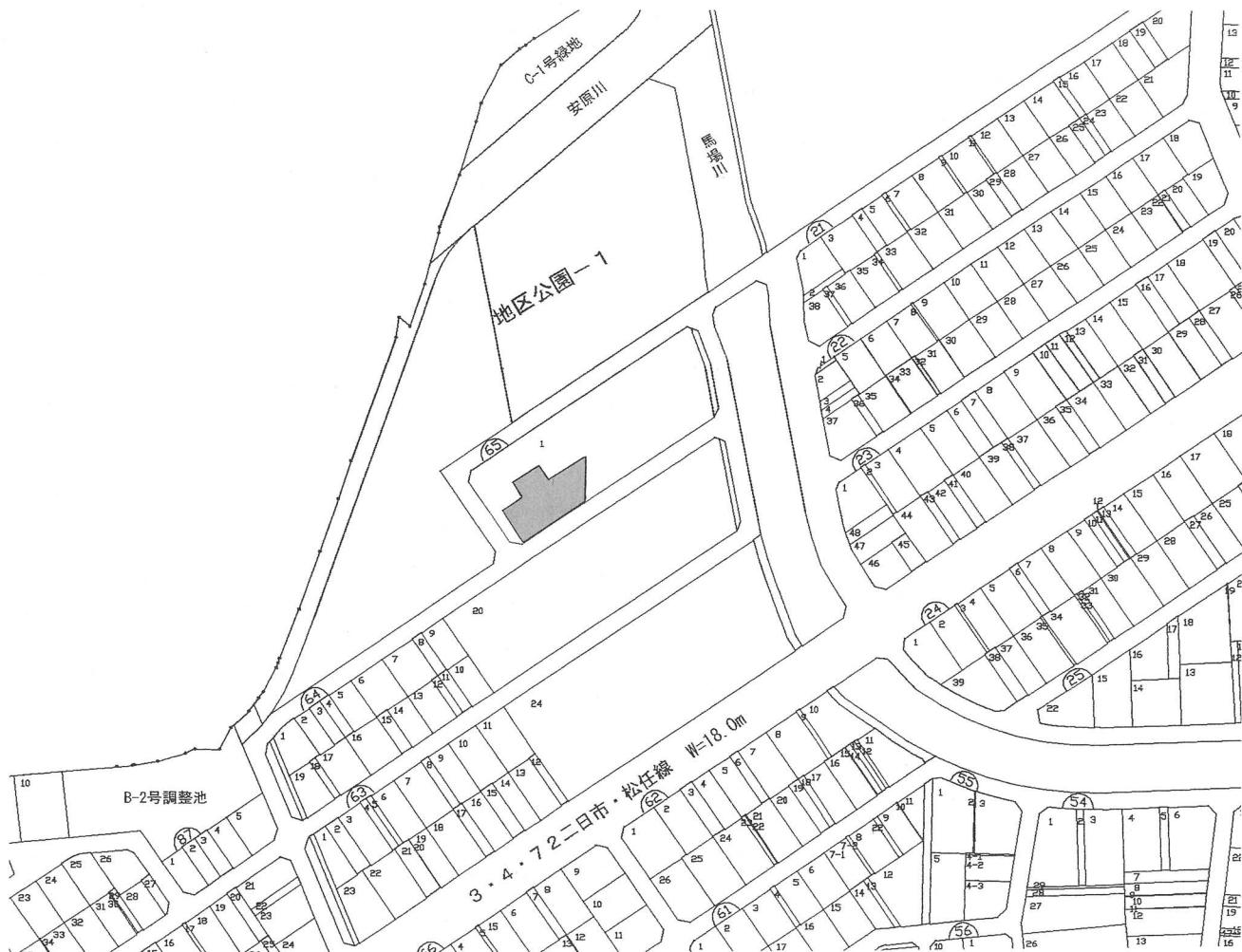
本調査において出土した遺物整理作業を同年度に実施した。遺物や図面の整理作業は町で雇用した臨時作業員が2名担当した。報告書の執筆・編集は町担当職員が行った。

整理作業手順は出土した遺物の洗浄、各遺構別に選別・記名、実測図作成、遺物や遺構実測図の製図である。作業は12月14日より遺物の洗浄・記名作業を実施した。12月17日からは分類・復元作業に着手し、12月22日より土器・石器の実測・トレース、遺構図トレースの作業を行い、翌年2月23日に終了した。

その間、文化財担当職員が報告書の執筆を1月より開始し、2月に遺物の写真撮影を行った。その後すべて取りまとめた編集を行い、同年3月に刊行した。

【整理体制】

整理主体 野々市町教育委員会(教育長 村上 維喜)
担当課 野々市町教育委員会文化振興課(課長 山下 真弓)
整理期間 平成22年12月14日～平成23年3月31日
担当 徳野裕子(野々市町教育委員会文化振興課 主査)
作業 大杉幸江、野村祥子



第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

野々市町は、石川県のほぼ中央に位置する。山海のない平坦地で、北東部は金沢市、西南部は白山市とそれぞれ接している。手取川扇状地北東部の扇央から扇端部にかけて南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²の町域を有している。

現在の野々市町は近世から明治大正期にいたる耕地整理開発により平坦な地形であるが、以前は微高地と微低地が混在する凹凸の多い地形であった。これは手取川から派生する多くの小河川が洪水や氾濫を繰り返すことによって島状地形がつくり出されたからである。野々市町の遺跡の多くはその微高地上に所在する。

本書で取り上げる二日市イシバチ遺跡は野々市町の北西部に位置する広大な遺跡である。遺跡周辺は以前までは田園風景の中をJR北陸本線の列車が走行する景色であったが、現在では北陸新幹線の線路建設工事や区画整理が進み、今まで広がっていた風景は更に大きく変わろうとしている。



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

二日市イシバチ遺跡の所在する手取川扇状地扇端部には縄文時代から中近世までの遺跡が数多く存在する地域である。ここでは町内の遺跡を概観していく。

縄文時代の主要な遺跡では、国指定史跡の3御経塚遺跡が挙げられる。この遺跡は縄文時代後・晚期の大集落跡で、竪穴建物や環状木柱列、多彩な土器・石製品などが出土している。

弥生時代は農耕文化が定着する時代であるが、野々市町周辺では後期になってようやく各地で集落が増加してくる。7二日市イシバチ遺跡をはじめとして、2御経塚遺跡・10三日市A遺跡などがある。

古墳時代に入ると再び遺跡数は減少する。1御経塚シンデン古墳や二日市イシバチ遺跡で前期古墳が確認されているのみで、集落についてもこの2遺跡のほかに上新庄ニシウラ遺跡程度しかなく、弥生時代後期とは比較しようがない少なさである。

奈良・平安時代には、手取川扇状地扇央部で政治勢力を背景とした39末松廃寺が7世紀に建立され、それに伴い、30三納アラミヤ遺跡・33栗田遺跡などの大規模な集落跡が急増する。

中世に入ると、在地武士の林氏と富樫氏が台頭してくる。林氏は野々市町南部から白山市鶴来地区にかけて、富樫氏は野々市町東部の高橋川流域からその北方にあたる伏見川流域一帯にかけて地盤を築いていった。林氏が活躍する鎌倉時代に高橋川を天然の要害とした武士の居館跡である24扇が丘ハワイゴク遺跡が出現する。承久の乱(1221)以降、林氏の勢力は衰え、富樫氏が台頭してくる。富樫高家は加賀国の守護職に任せられ、守護所(22富樫館跡)を野々市に構えた。館の周囲では市場などの都市的機能をもった場や、墓地やその関連施設など信仰の場があったことが分かっている。当該時期の集落遺跡は、三日市A遺跡・12徳用クヤダ遺跡・32三納ニシヨサ遺跡などでも確認されている。

参考文献

- 『野々市町史 資料編1』 2003 野々市町史編纂専門委員会
- 『野々市町史 集落編』 2004 野々市町史編纂専門委員会
- 『図説 野々市町史』 2005 野々市町史編纂専門委員会



第3図 周辺の遺跡(S=1/20,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	弥生 古墳 中世 近世	28	三林館跡	中世
2	御経塚経塚	中世 近世	29	三納トヘイダゴシ遺跡	中世
3	御経塚遺跡	縄文 弥生 古代 中世 近世	30	三納アラミヤ遺跡	弥生 中世
4	御経塚オツソ遺跡	弥生 中世	31	藤平田ナカシギジ遺跡	中世
5	長池ニシタンボ遺跡	縄文 弥生 古墳 中世 近世	32	三納ニヨサ遺跡	中世
6	長池キタノハシ遺跡	弥生 中世 近世	33	粟田遺跡	縄文 古代 近世
7	二日市イシバチ遺跡	弥生 中世 近世	34	清金アガトウ遺跡	縄文 古代 中世
8	野代遺跡	縄文	35	末松信濃館跡	古代 中世
9	三日市ヒガシタンボ遺跡	古代 中世	36	末松福正寺遺跡 福正寺跡	古代
10	三日市A遺跡	弥生 古代 中世	37	末松ダイカン遺跡	古代
11	郷クボタ遺跡	古代 中世	38	末松B遺跡	古代
12	徳用クヤダ遺跡	古代 中世	39	末松廢寺跡	弥生 古代 中世 近世
13	上宮寺跡	中世	40	古元堂館跡	不詳
14	押野大塚遺跡	縄文 弥生	41	末松C遺跡	古代
15	押野タチナカ遺跡 押野館跡	縄文 弥生 中世	42	末松古墳	古墳
16	押野ウマワタリ遺跡	弥生 中世	43	末松A遺跡	縄文 古代 中世
17	横川本町遺跡	弥生 中世	44	大館館跡	古代 中世
18	高橋セボネ遺跡	弥生 中世	45	末松砦跡	不詳
19	山川館跡	縄文 中世	46	法福寺跡	不詳
20	高橋ウバガタ遺跡	弥生	47	末松しりわん遺跡	古代 近世
21	扇が丘ゴショ遺跡	弥生 古代 中世	48	下新庄アラチ遺跡	古代
22	富樫館跡	縄文 中世 近世	49	下新庄タナカダ遺跡	古代
23	扇が丘ヤグラダ遺跡	古代 中世	50	上新庄遺跡	古代
24	扇が丘ハワイゴク遺跡	縄文 弥生 古代 中世	51	上林古墳	古墳
25	菅原キツネヤブ遺跡	中世 近世	52	上林テラダ遺跡	古代
26	堀内館跡	縄文 中世 近世	53	上新庄ニシウラ遺跡	弥生 古墳 古代
27	田中ノダ遺跡	弥生 古墳	54	上林遺跡	弥生 古代
			55	安養寺遺跡	弥生 古代

第1表 野々市町の遺跡

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査を行うにあたり、町建設課に繩張り設定を依頼し、大型掘削機で遺構面までの土砂を除去した。掘削作業終了後、グリッド杭の設定を外部委託により行った。グリッド杭は10m×10mの区画を設定し、西から東方向へはA～Cのアルファベットを、北から南方向へは1～2の算用数字を用いてグリッド割を行っている。グリッド杭設定と同時に本格的な調査を開始している。作業の内容は、人力による遺構の検出・掘削や各遺構の記録の図示、写真撮影などである。

調査の手順としては、遺構面をジョレンで削り精査を行い、遺構確認作業を行っている。今回調査では堅穴建物、掘立柱建物、井戸、堅穴状遺構、土坑、溝などの遺構を検出した。遺構確認作業の際に出土した遺物は、グリッド杭を利用し、区割りを行い遺物の取り上げを行った。今回は面積が狭小であったため3区画に分けている。確認調査後は略図を作成し、遺構1基ごとに遺構番号を付した。

遺構の掘り下げ方法については、堅穴状遺構は四分法を採用し、井戸、ピットについては半切し発掘を行っている。遺構の土層断面や遺物の出土状況等の写真撮影は白黒フィルム、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラでの撮影も行った。記録作業はスケール1/20で記録を行い、遺構から出土した遺物の取り上げはあらかじめ付した遺構番号と照合し行った。それらの作業が完了した後、調査区内の排水作業や清掃を行い、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と測量を実施、現地での作業を完了した。

整理作業については、出土した遺物を洗浄、記名、接合、復元を行い、残りの良いものなどを選択して実測作業を行い、これらの実測図や、現地で表記した遺構実測図などの製図を行った。

これらの作業完了後、遺物の写真撮影、執筆、図面、写真的レイアウト等を行い、報告書を刊行した。報告書中の遺構図版作成にあたっては、遺跡平面図に遺構番号を図示し、本文中の遺構図の縮尺は、1/40・1/60・1/100で図示した。遺物図版作成にあたっては、縮尺は1/3で図示した。

第2節 層序

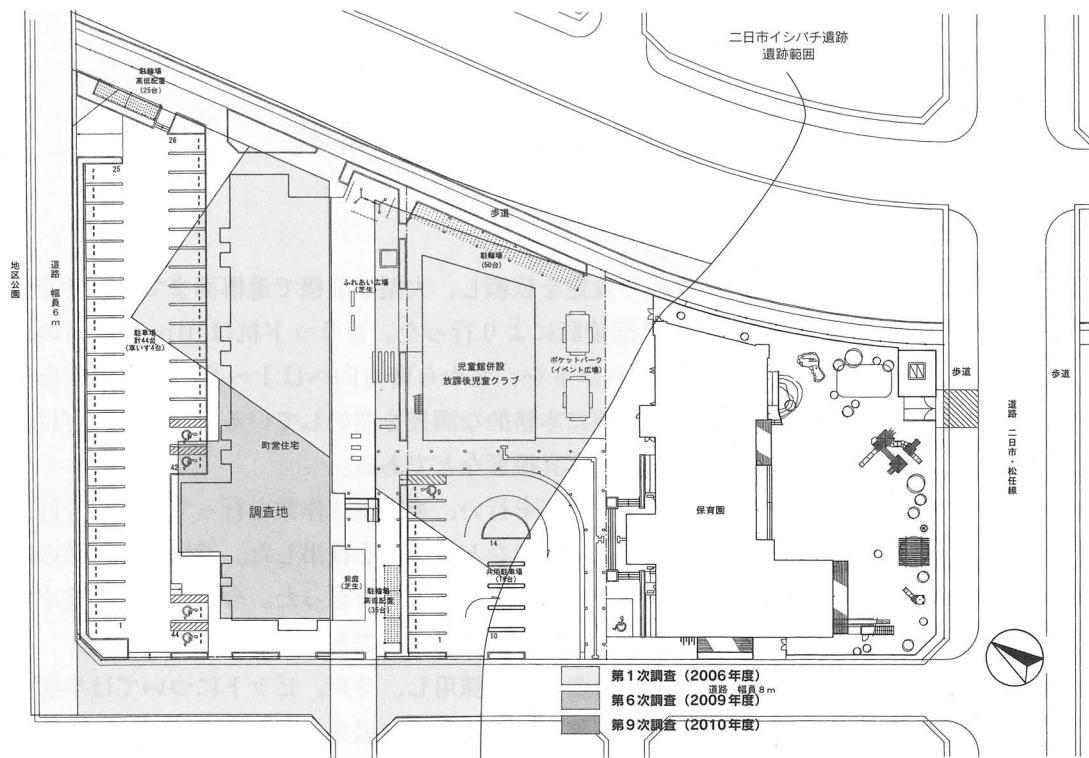
層序については第4図土層断面模式図を基に説明していく。

図示した模式図は調査区の西壁のものである。

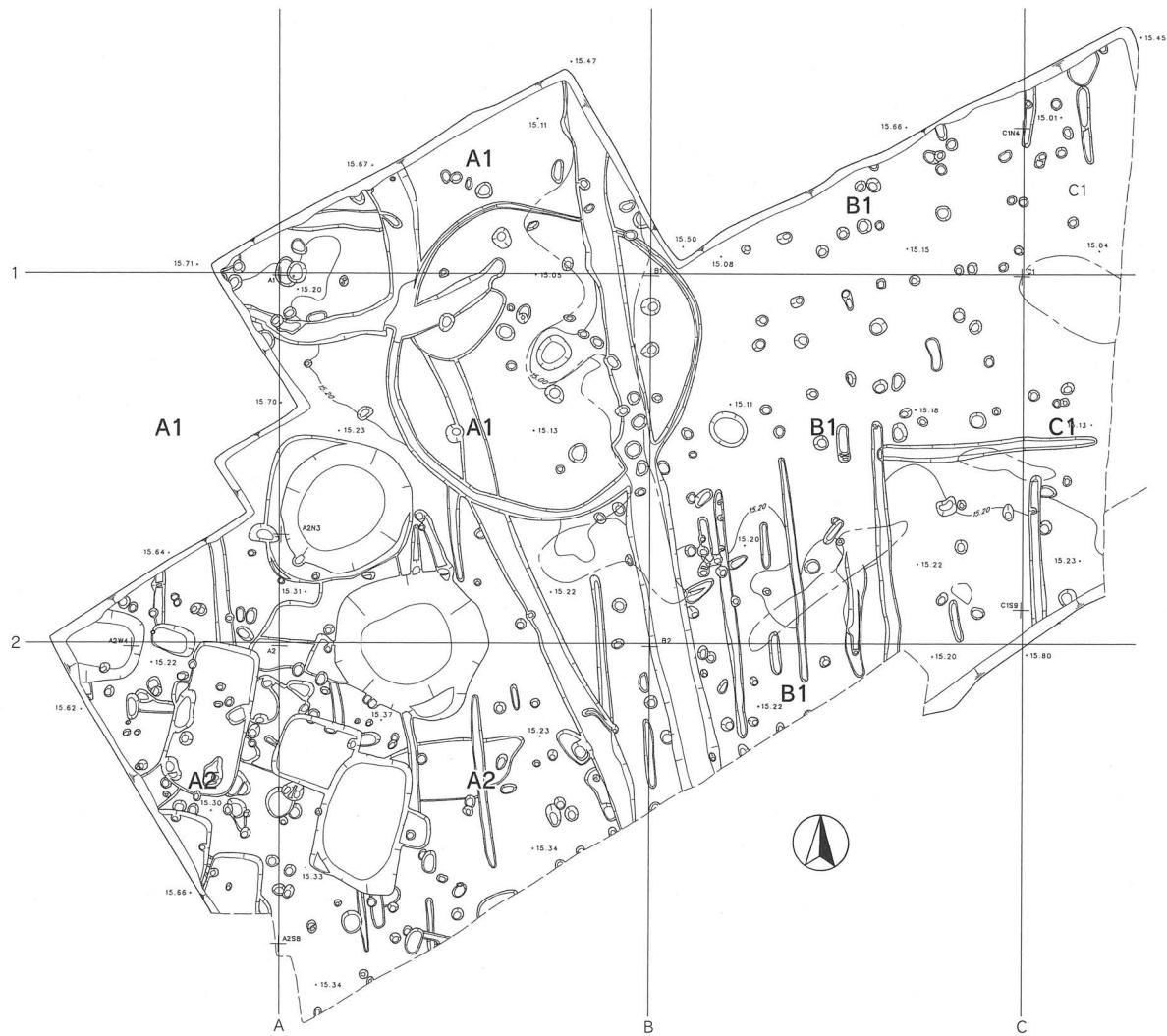
第1層から第2層は現耕作土で、第1層の土質は灰色粘質土であった。第3層は黒褐色土層で中世の遺構面及び古代以前の包含層と考える。これらの面で詳細な精査を行うべきであったが、遺構検出など作業において時間のかかることが予想されたため、第4層手前まで掘削機で除去した。第4層は黄色土をベースとする古代以降の遺構面及び地山面である。

水田耕作土	第1層
水田耕作土（床土）	第2層
黒褐色（10YR1/3）粘質土	第3層
黄色（2.5Y8/6）粘質土	第4層

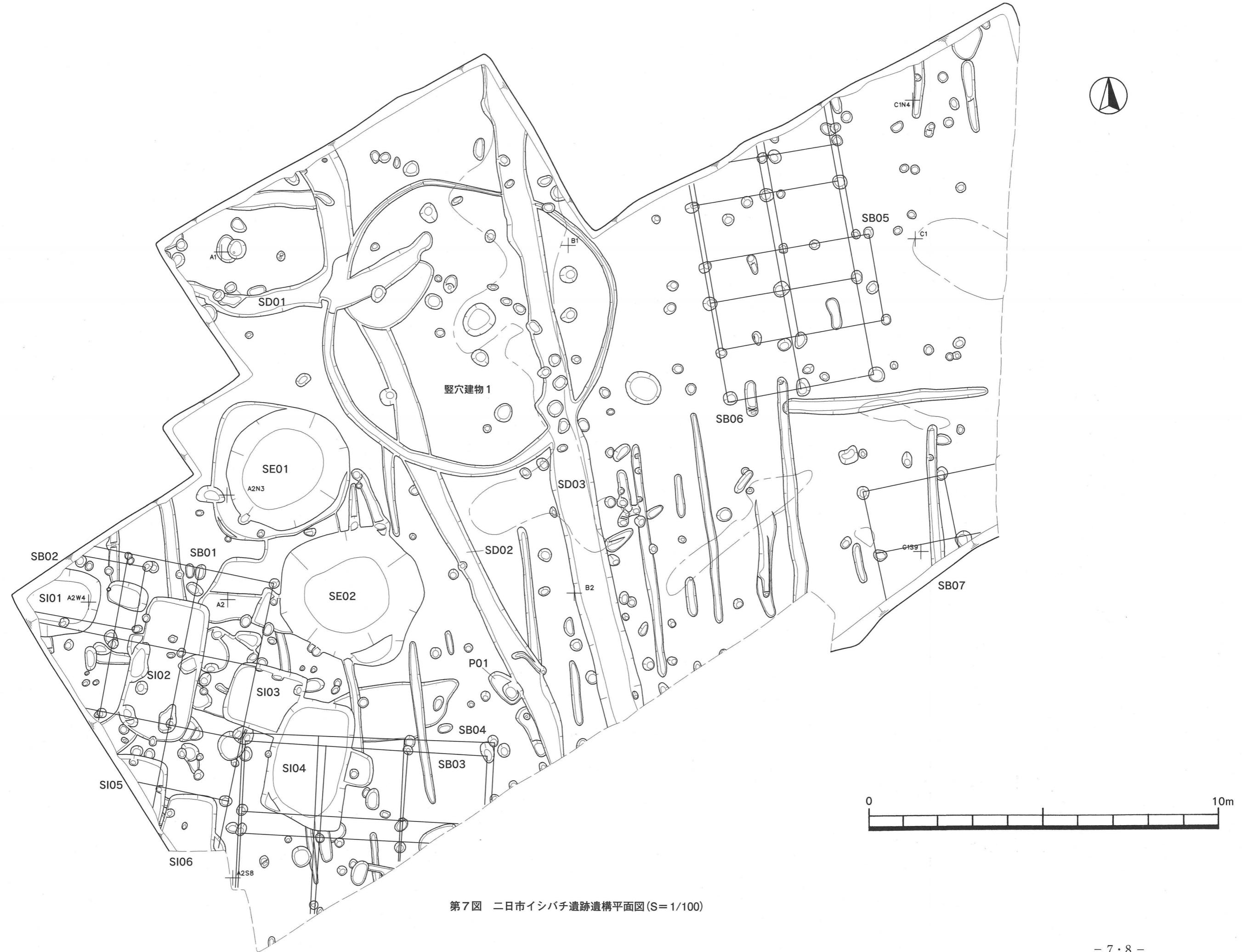
第4図 土層断面模式図



第5図 調査区位置図 ($S=1/1,000$)



第6図 グリッド設定・区割図 ($S=1/200$)



第3節 遺構

本調査では弥生時代・中世の遺構を確認している。弥生時代の遺構は竪穴建物1棟、ピットを確認している。中世の遺構は掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸、溝などを確認している。

遺構はSD02を境に西側では遺構の集中が見られるが、東側は比較的密度は希薄になっていく。

調査では畝溝も確認されているが、出土遺物がなく、時期を確定するには至らなかった。畝溝は周辺調査でも広範囲に広がっていることから、その調査結果を待ちたい。

当調査区の周辺には未報告であるが第1次・第6次の調査区が隣接しているため、遺構の規模はその周辺調査の遺構図を考慮したうえで遺構の概要を記載していく。なお柱穴等の個別の遺構については本調査区内のみの詳細を記述する。

弥生時代の遺構

(1) 竪穴建物

竪穴建物1(第8図)

調査区北側中央で確認した。本建物以降の溝(SD02・03)やピットも複合している。形は長辺8.3m、短辺8.0mの歪な隅丸方形を呈し、6本主柱構造である。調査担当者の不手際により、重機掘削が深くなりすぎてしまったため、正確な状況は確認できなかったが、確認できたところで、壁溝は一番幅広部分で42cm、最深部26cmで周り、床面の一部に貼床の痕跡が確認できた。建物内部からは甕(1)、小型甕(2)、高壊脚部(3)が出土しており、周溝内部からも甕(4・5)が出土している。また建物中央にはテラスを有する深さ34cmのP1があり、内部からは甕(7~9)が出土している。また、本報告書掲載以外にも土器片が多数出土しているが復元には至らなかった。

(2) ピット

P01(第8図)

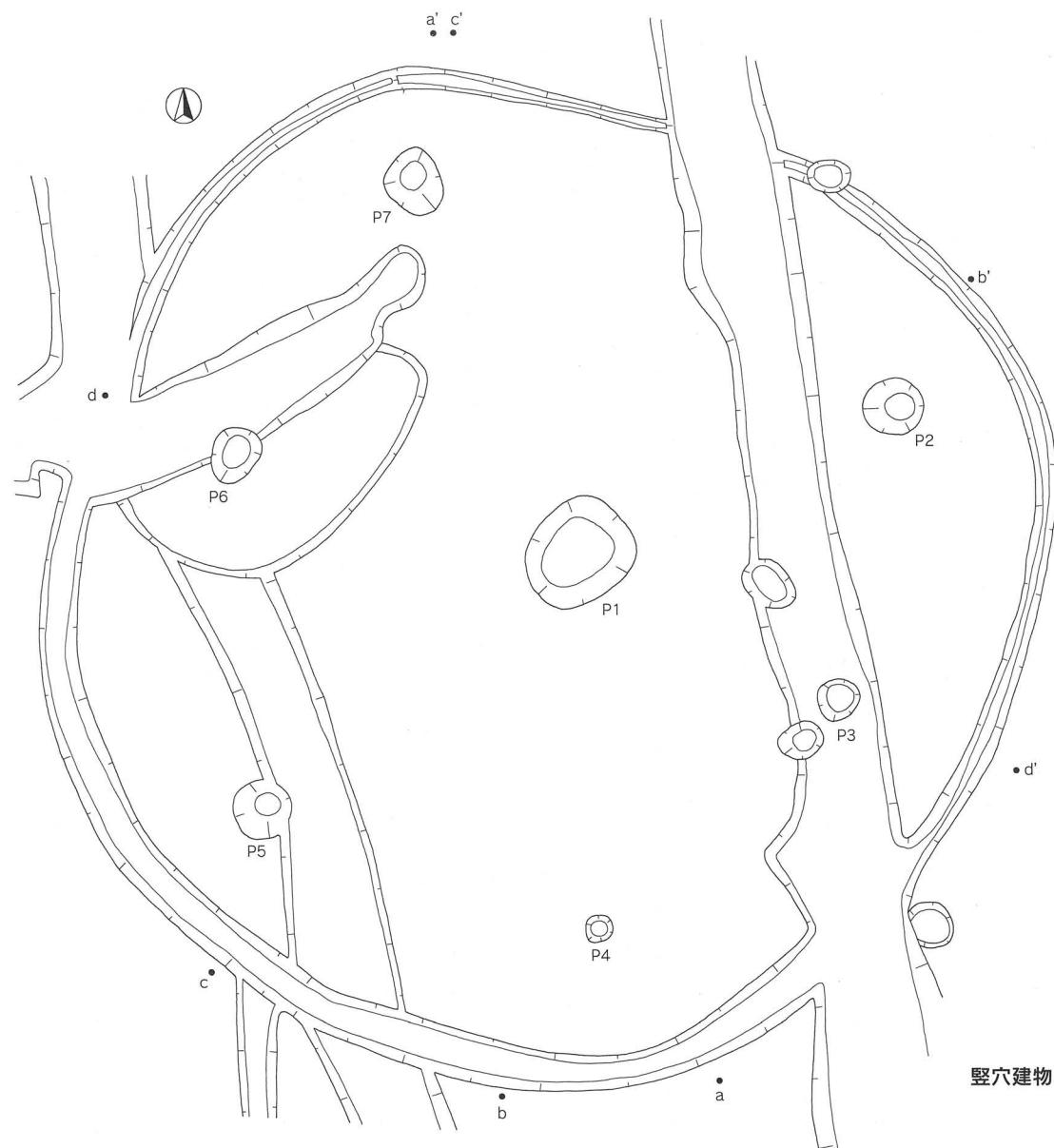
SD01の西側に切り合って位置する。一部SD01に切られているが形状は歪な長方形と想定され、長軸は1.1m、深さは最深部で27cmを測る。上層の黒褐色(10YR3/1)粘質土(第8図土層断面図土色No.2)から弥生土器が数点(10)出土している。出土した弥生土器の中に1点だけ中世の土師器(11)が出土しているが流れ込みによるものであると思われる。

中世の遺構

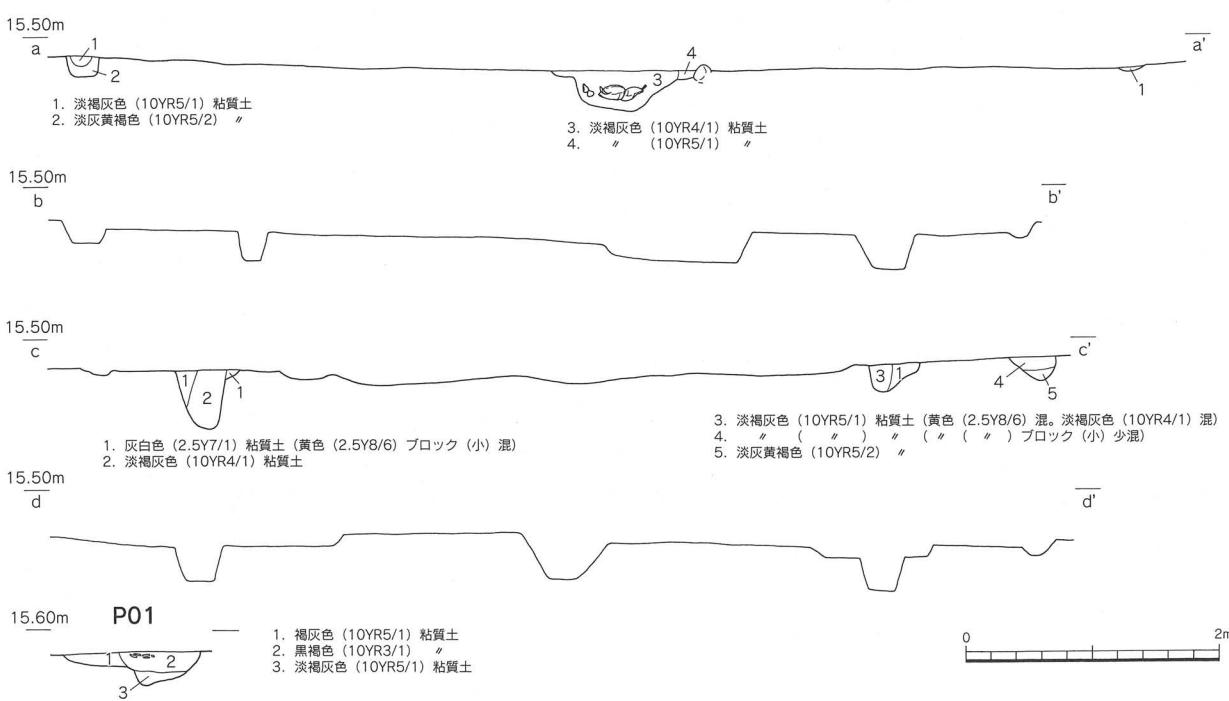
(1) 掘立柱建物

SB01(第9図)

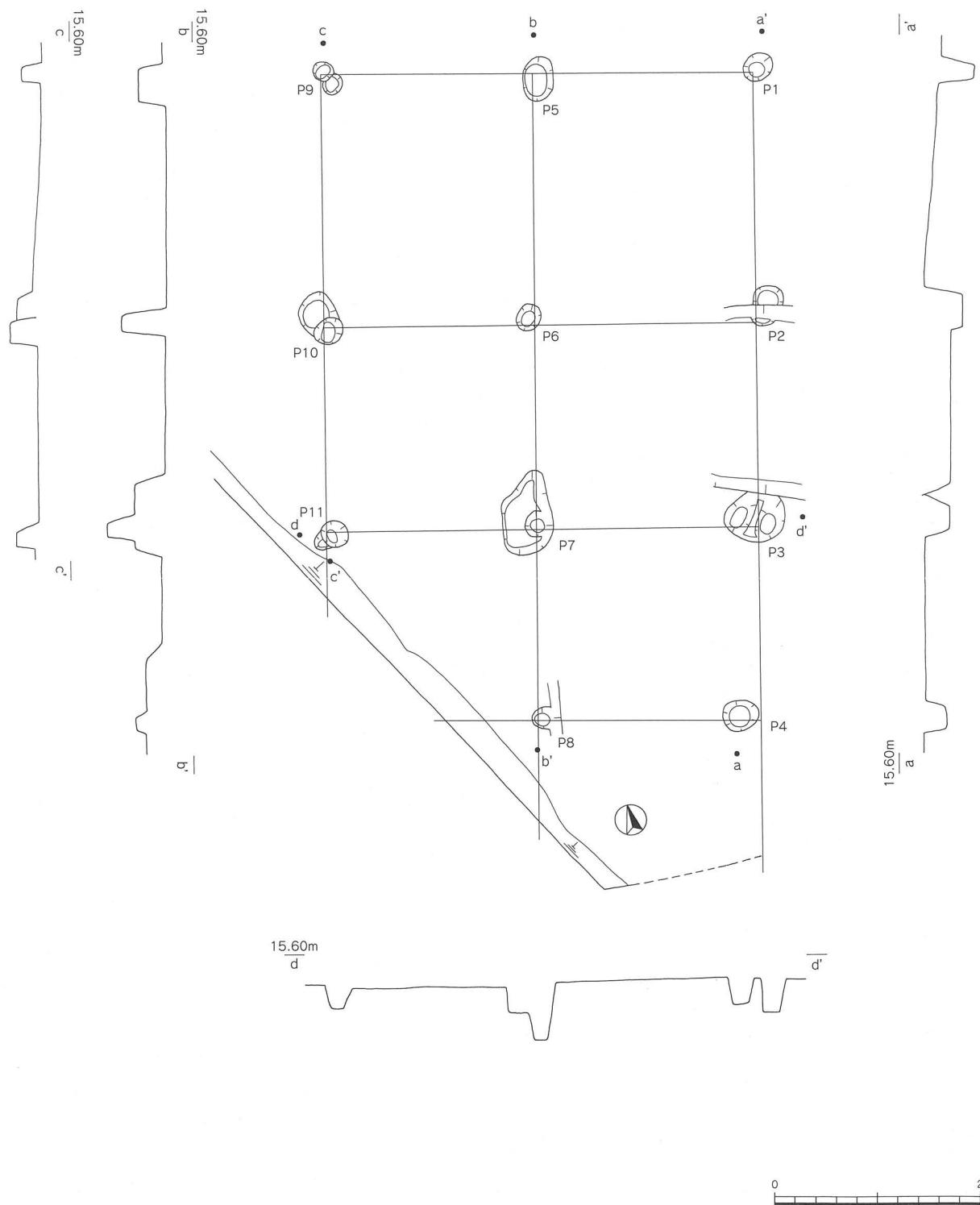
調査区北西で確認した軸N-11°Eの建物である。北側と西側が調査区外となってしまうが、第6次調査との関係から3間×4間の建物であることが確認できた。桁行を南北にもつ総柱建物で、桁行8.3m×梁行6.0mで床面積49.8m²になる。柱穴の形は様々で、直径が28~58cmで、深さは14~57cmであった。P2は後述のSI03と重複しており、切り合いからSI03が新しいことが分かっている。P6とP7はSI02内、P8はSI05内で確認されたが前後関係は不明である。何れの柱穴からも遺物は出土していない。



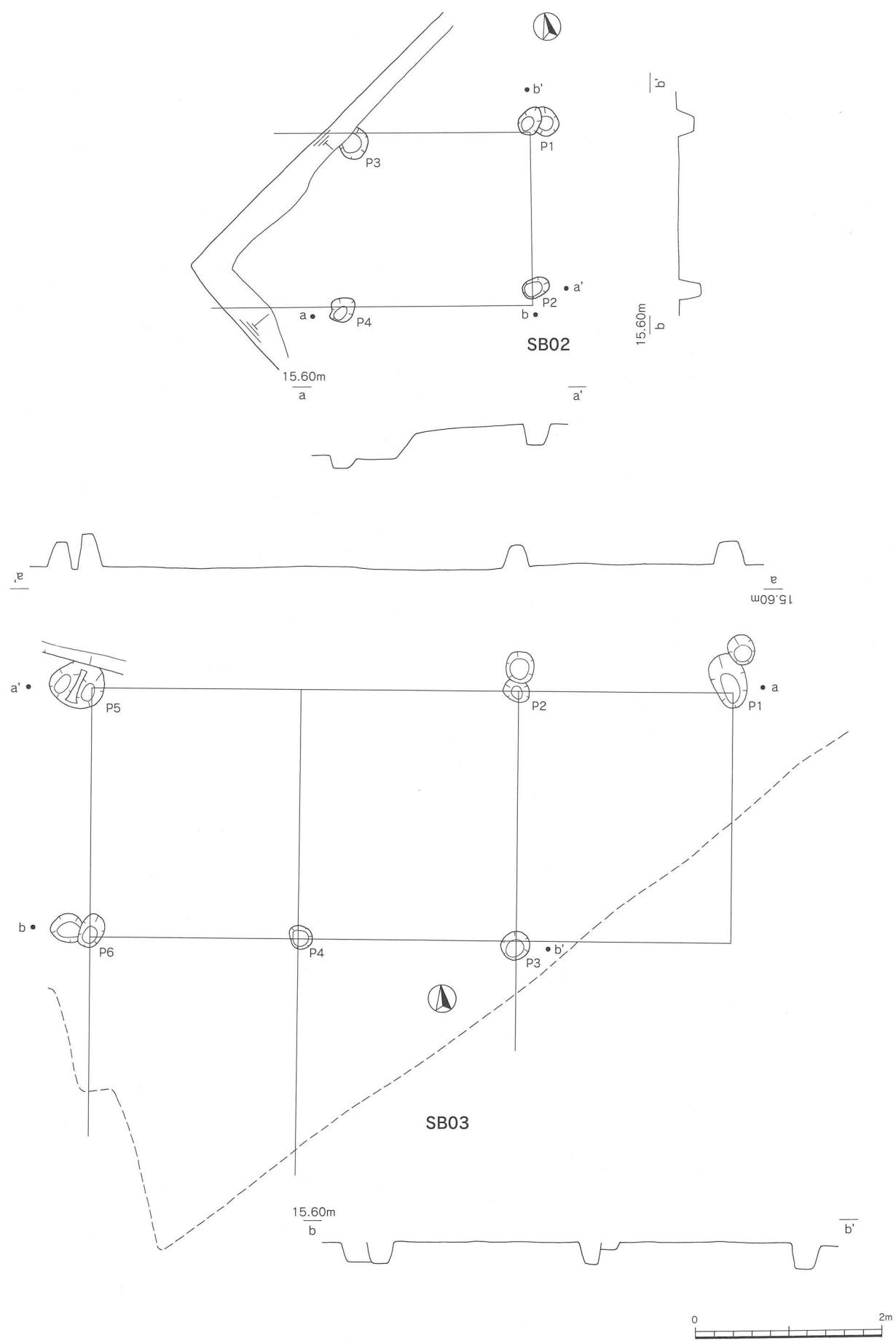
竪穴建物 1



第8図 竪穴建物1・P01遺構図・土層断面図 (S=1/60)



第9図 SB01遺構図・断面図($S=1/60$)



第10図 SB02・SB03遺構図・断面図($S=1/60$)

SB02(第10図)

調査区北西に位置し、SB01と重複する軸N-5°Eの建物である。ほとんどが調査区外となるが、桁行は1間以上になり、梁行は1間1.8mで床面積は3.96m²以上である。柱穴は歪な形が多く、直径30~34cm、深さは17~57cmであった。P4はSI01の内部で確認した。遺物は出土していない。

SB03(第10図)

調査区西南付近に位置する軸N-3°Eの建物である。南側は調査区外となっているが第1次調査の結果から3間×3間の総柱の建物跡であることが確認できた。桁行8.5m×梁行7.0mの南北棟で床面積59.5m²である。調査区内の柱穴は6基確認でき、直径26~58cmで深さは21~33cmであった。P2とP5の間には柱穴が存在していたと考えられるが、SI04の掘削により柱穴は確認することができなかつた。柱穴から遺物は出土していない。

SB04(第11図)

SB03と重複する軸N-4°Eの建物である。SB03同様南側が調査区外となっているが第1次調査の結果から3間×3間の総柱建物であることが分かった。桁行7.4m×梁行7.2m、床面積53.28m²で、規模はSB03より小さい。調査区内では6基の柱穴を確認しており、柱穴の直径は24~58cmで深さは11~33cmであった。遺物は出土していない。P5とSB03のP5は切り合いをもつ遺構であると思われるが確認に至らず同一の柱穴とした。P2とP5及びP3とP6の間の柱穴はSI04の掘削により失われていた。P1・P2はSB03の柱穴と重複しており、何れもSB04がSB03を切っていることから、前後関係はSB04の方が新しいと思われる。何れの柱穴からも遺物は出土していない。

SB05(第11図)

調査区北東部に位置し、軸N-11°Wに向きをとる建物である。2間×2間以上の総柱建物で、南北については2間までは確認できたが更に北に伸びる可能性がある。東西ラインの長さは4.8m、南北ラインは5.3mであった。調査区内で確認できた柱穴は9基で、歪なものもあるがそのほとんどが円形に近く、直径28~48cm、深さは12~39cmであった。P1とP4の軸に若干のずれが生じるが、P1にはP3と軸が合い、P3がP4と軸が合うため、ここでは柱穴を2基設けた。遺物は出土していない。

SB06(第12図)

SB05と重複する軸N-10°Wの建物である。SB05同様東西ライン2間は確認できるが、南北は2間以上になる可能性がある総柱建物である。東西2間の長さは4.25m、南北の長さは5.55m以上で床面積23.5m²以上である。調査区内で確認できた柱穴9基は円形が中心で直径38~48cm、深さは15~46cmであった。遺物はP2から珠洲焼の壺(12)、P4からは土師器皿(13)が出土している。

SB07(第12図)

調査区南東隅に位置するN-11°W建物である。東及び南側が調査区外となってしまうが、第1次調査の結果から4間以上×2間の総柱建物であることが分かった。桁行7.6m以上×梁行4.6mの南北棟で、床面積34.9m²以上となる。遺物はP4から土師器片が1点出土している。

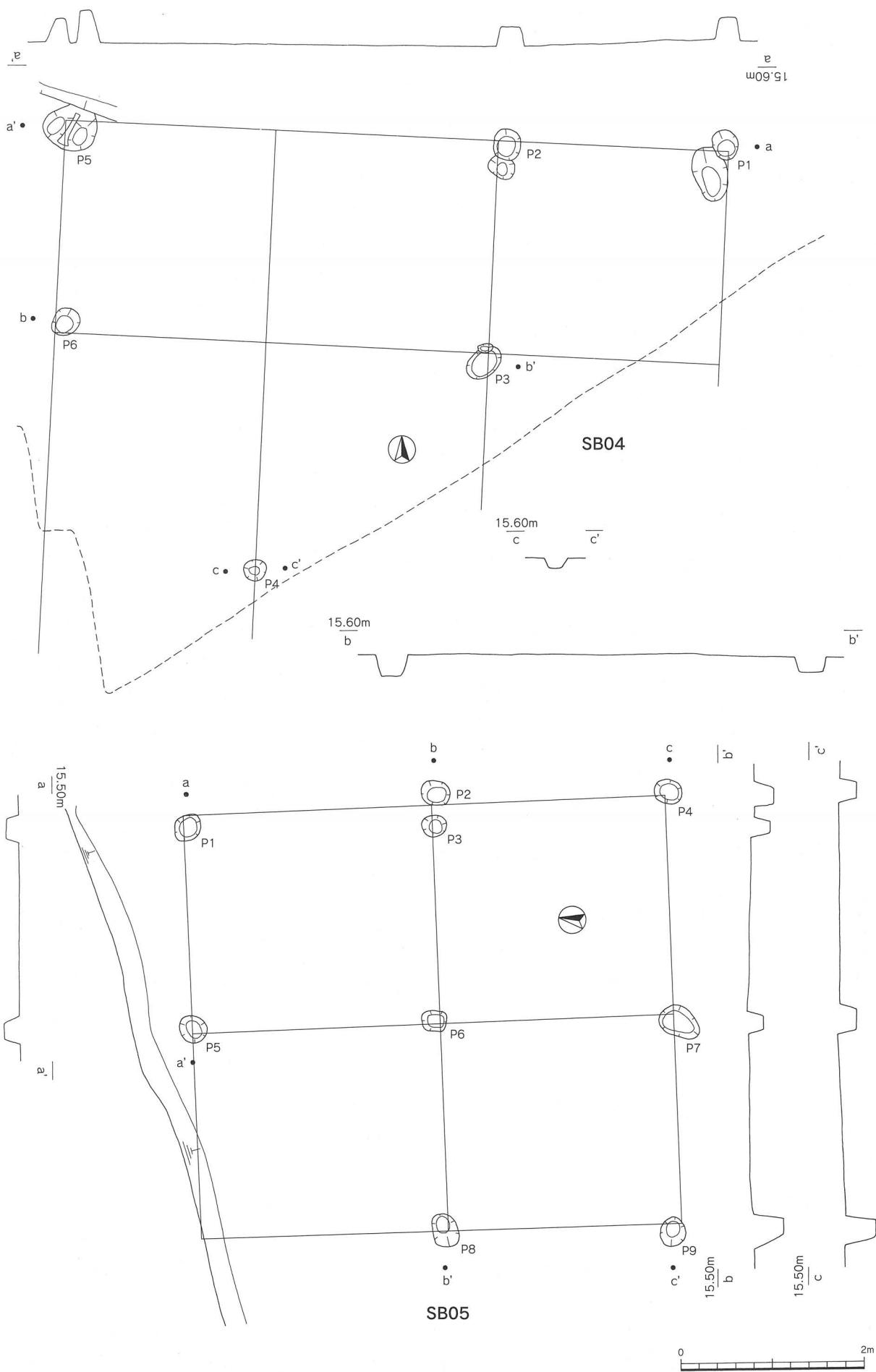
(2) 積穴状遺構

SI01(第13図)

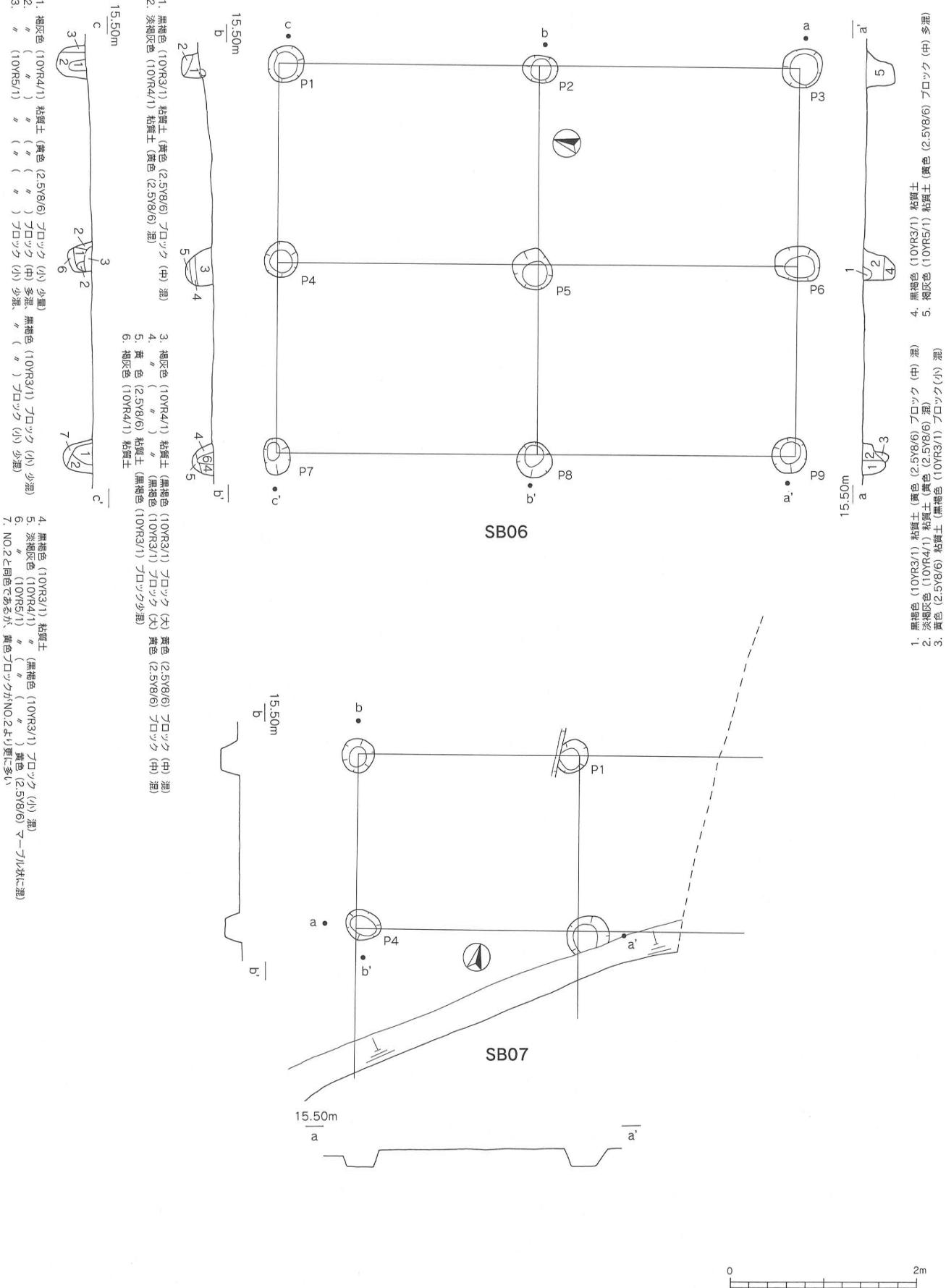
調査区北西隅に位置する。遺構の一部が調査区外へ伸びるため、全体の様相は分からない。短軸1.9m、長軸2.1m以上、深さ44cmを図る。遺物は鉄釘(14・15)、土師器皿片(16)が出土している。

SI02(第13図)

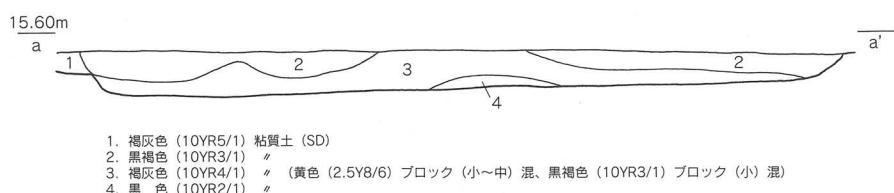
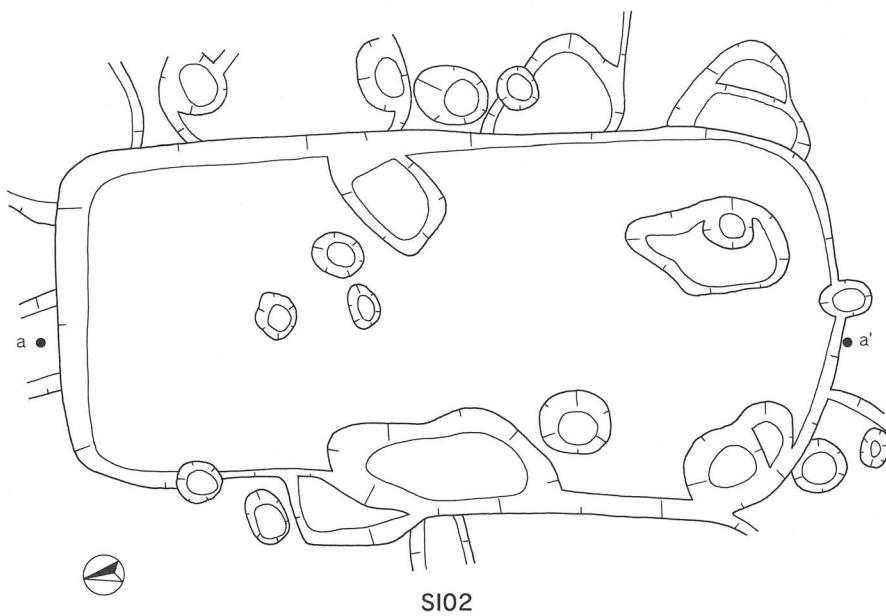
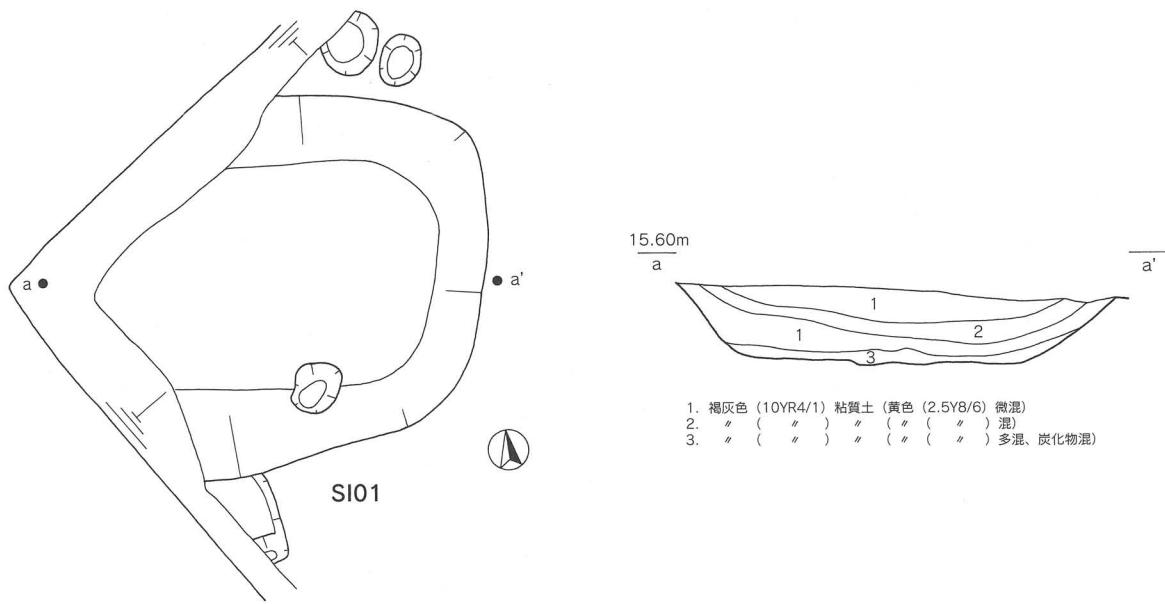
調査区北西部、SI01の東側に位置する。短軸2.0m、長軸4.1mの長方形で、深さ24cmを測る。床面は貼り床が施され、固く締まっていた。内部にはピットが数基確認され、そのうちの2基はSB01の柱穴である。遺物は土師器皿片(17)、青磁片が出土している。



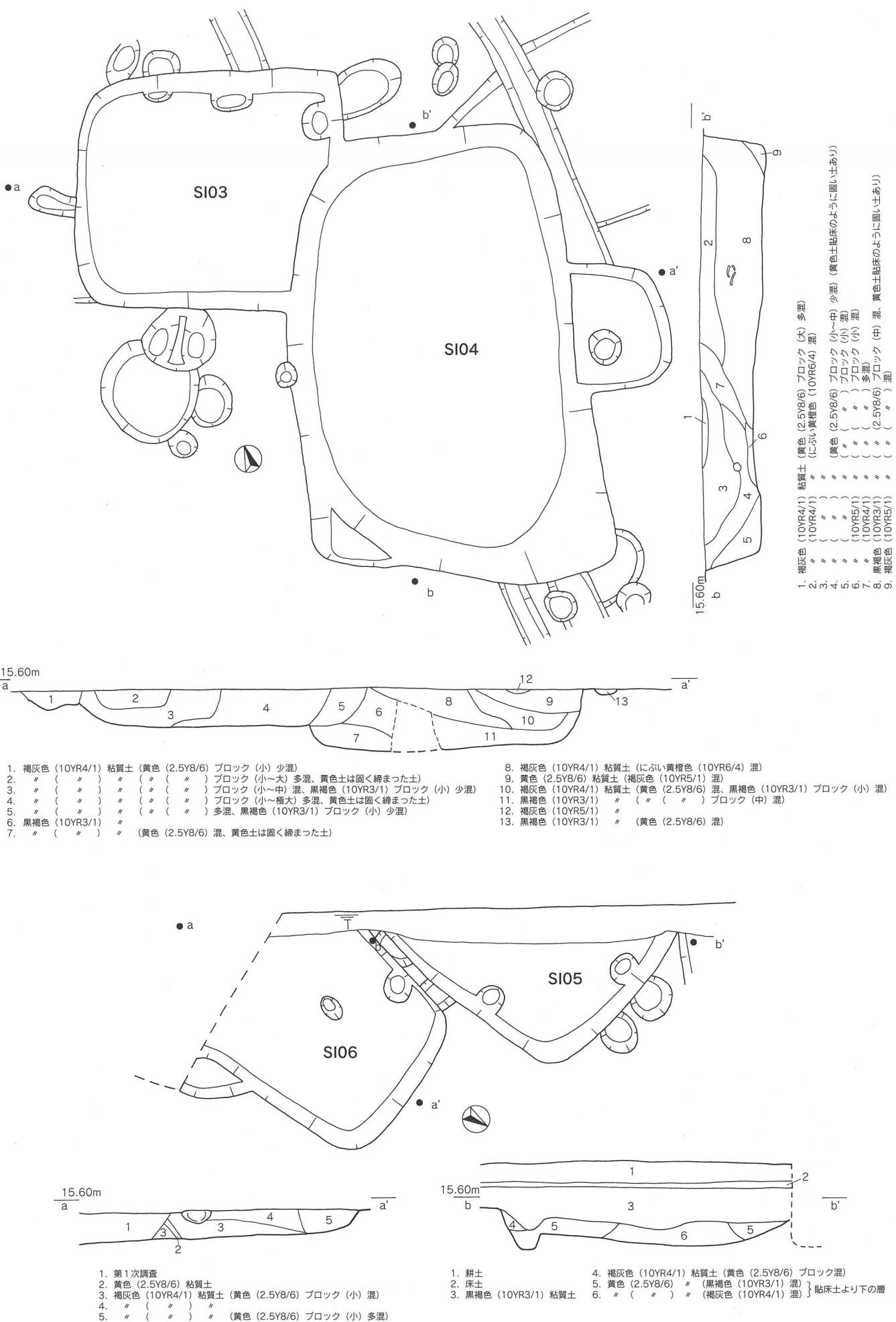
第11図 SB04・SB05遺構図・断面図(S=1/60)



第12図 SB06・SB07遺構図・土層断面図 (S=1/60)



第13図 SI01・SI02遺構図・土層断面図 (S=1/40)



第14図 SI03・SI04・SI05・SI06遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SI03(第14図)

SI02の東に位置する。南北軸1.9m、東西軸2.0mの方形で、深さは27cmを測る。南東の角はSI04と切り合う。遺物は青磁碗の底部(18)と土師器片が出土している。

SI04(第14図)

SI03と北西隅が重複する形で検出された。2つの前後関係は平面プラン及び土層体積状況から見てSI04が古いことが分かっている。平面図からは、短軸2.3m、長軸3.5mで深さ53cmの歪な長方形に見えるが、土層断面図から遺構の南側は深さがほぼ同じの別の遺構が切り合って存在していたようである。遺物は縄文土器片(19)、砥石(20)、珠洲焼鉢(21)、が出土している。

SI05(第14図)

調査区西壁中央に位置する。遺構のほとんどが調査区外となっている。全体の規模は不明で、深さは20cmを測り、床面には貼り床が施されていた。規模は不明であったが、周辺で竪穴状遺構が集中していることと、形状から考えて本遺構も竪穴状遺構とした。遺物は出土していない。

SI06(第14図)

調査区西壁に切られる形で確認している。短軸1.5m、長軸1.65m以上の長方形で、深さ最深21cmを測る。南側が第1次調査の遺構と接するが明確な規模、様相は不明である。床面は貼り床が施され固く締まっていた。遺物は土師器皿(22)が出土している。

(4)井戸

SE01(第15図)

調査区北西の竪穴建物1の西側に位置する。直径4.0mの円形で、深さは1.7mまでは確認できたがそれ以上の掘削は危険と判断したため、完掘には至らなかった。覆土には上層の褐灰色(10YR5/1)粘質土に礫が多く混在していたほか、堆積土の中央部(第15図土層断面図土色No.11)には土の混じりのない礫のみがぎっしり詰まった状態で確認されている。遺物は古代有台坏(23)、珠洲焼すり鉢・鉢(24~30)、越前焼すり鉢(31)、焼成不良の鉢底部(32)、加賀焼壺(33)、瀬戸美濃折縁皿(34)などが出土している。

SE02(第16図)

SE01の南側30cmほどしか離れていない場所で確認された。直径4.0mほどの歪な円形でSE01と同様完掘には至らなかった。覆土はSE01ほどではないが中央部に礫を多く含んだ層(第16図土層断面図土色No.5)を確認している。遺物は珠洲焼すり鉢(35~37)、土師器皿(38~49)、鉄製笄(50)などが出土している。

(5)溝

SD01

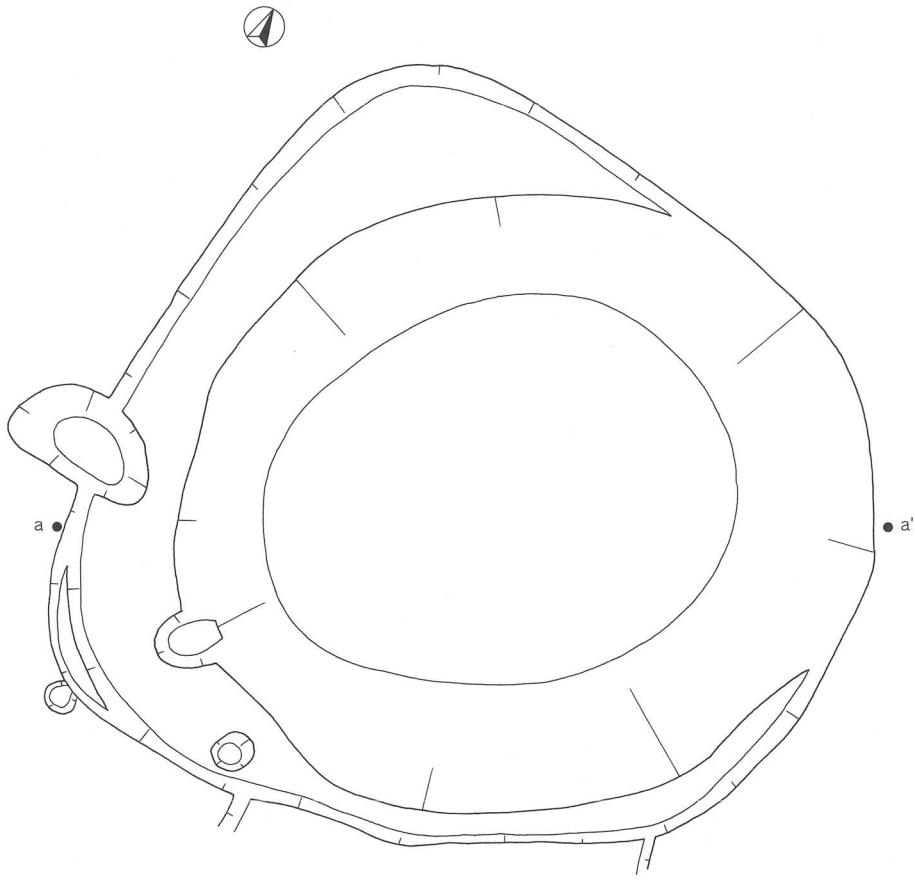
竪穴建物1の北西に位置する。竪穴建物1の内部を切るようにして走るが、浅いため、西壁から7m程進んだところで確認できなくなる。溝幅は最大で70cm、深さは最深で16cmであった。遺物は古代須恵器有台坏(51)、須恵器片が出土している。

SD02(第16図)

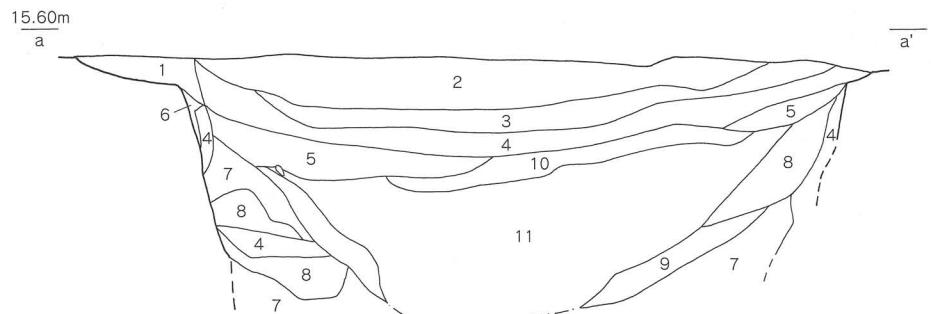
調査区中央付近を南北に走る溝である。幅は58~80cmで深さは6~14cmを測る。一部竪穴建物1を切る形で確認された。遺物は弥生土器片と土師器片が出土している。

SD03(第16図)

調査区中央を走る南北溝である。SD01と同様竪穴建物1を切っている。幅は70cm~1.3m、深さは10~28cmを測る。底部には礫が多数混じっている。SD01とは1.3mから4.5mの距離を置いて並行する。遺物は石斧(52・53)、短刀(54)、越前・珠洲焼すり鉢が出土している。



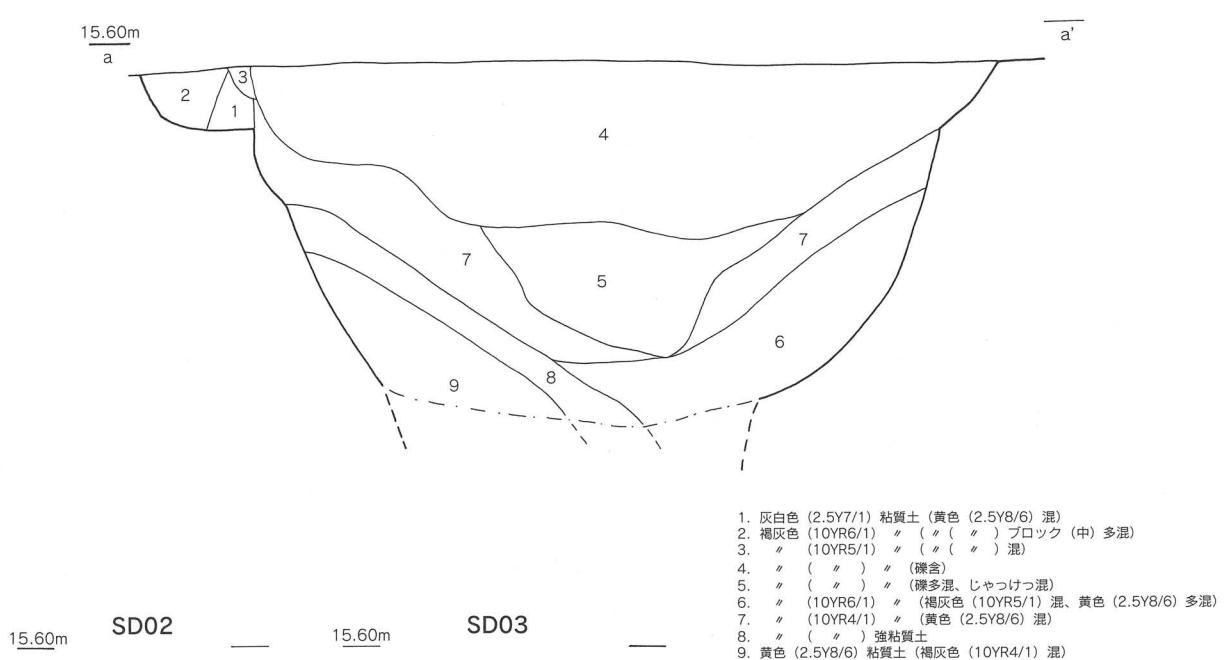
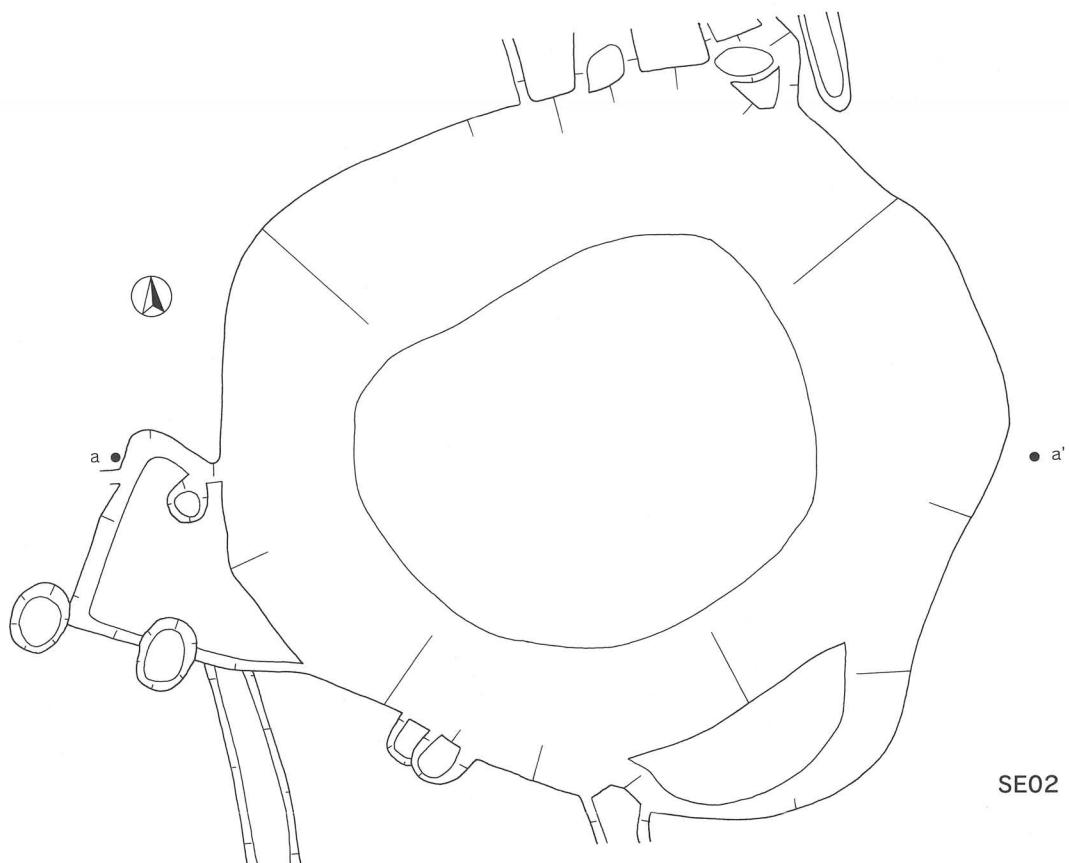
SE01



- | | |
|--|--|
| 1. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (黄色 (2.5Y8/6) 少混) | 10. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (黄色 (2.5Y8/6) ブロック混、サラサラした土) |
| 2. " (") " (1cm ~ 20cm 大の塊多混) | 11. 塵が詰まっている状態 |
| 3. " (") " | |
| 4. " (10YR4/1) " (黄色 (2.5Y8/6) 混) | |
| 5. " (") " | |
| 6. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質土 | |
| 7. " (") " (褐灰色 (10YR6/1) 混) | |
| 8. 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 (黄色 (2.5Y8/6) 混) | |
| 9. 褐灰色 (10YR4/1) " | |



第15図 SE01 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



1. 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

1. 黑褐色 (10YR3/1) 粘質土
2. 褐灰色 (10YR4/1) "



第16図 SE02・SD02・SD03遺構図・土層断面図 (S=1/40)

第4節 遺 物

本調査では縄文時代、弥生時代、古代、中世の4時期の遺物が確認され、これらの中で遺構から出土したものや、特出すべき形態のものを中心に59点選定し、実測図を掲載した。

縄文時代については土器片及び打製石斧などの石製品が数点出土している。

弥生時代についてはピットや遺構検出時に出土したものもあるが、遺物のほとんどは竪穴建物1からの出土で、甕などの土器が多く出土している。

古代では須恵器、土師器が数点出土しているのみである。

中世では、竪穴状遺構、井戸からの出土がほとんどで、土師器、国産陶器が多く、中国製磁器、鉄製品、砥石などの石製品は数点の出土であった。

以下、主要な遺構からの出土資料や特徴的な土器などを抽出して概説を行う。

1～9は竪穴建物1から出土した。1・2は床面付近、4・5は周溝、7～9はP1からそれぞれ出土した有段口縁甕である。弥生時代後期後半(3期)に位置づけられる。1は口縁外面に擬凹線5本を有する甕で、口縁部は短く、若干外反する。2は口縁外面が無文で、体部外面にミガキ調整を行っている小型の甕である。頸部周辺には剥離が目立つ。4は緩い段を持った口縁で、外面に擬凹線が薄く残る。肩部外面に刺突文が施され、体部には斜位の刷毛目調整痕も確認された。口縁から体部にかけて煤が付着していた。5は口縁外面に擬凹線が5本施され、一部に2本の工具痕が斜位に刻まれている。肩部外面には櫛描文が巡らされている。7は外反する口縁を有し、外面には擬凹線が12本、肩部外面には刺突文が施されている。体部～底部外面にはほぼ垂直の刷毛状工具による調整痕が残る。8は口縁端部が垂直に立ち上がり、外面に7本の擬凹線が施されている。肩部外面には櫛目が施されている。9はやや垂直に立ち上がる口縁に、外面には擬凹線が13本施され下端部が垂下する。肩部外面には櫛描文が施され、煤が付着している。3・6は高坏の脚部である。何れも裾部である。3は床面付近からの出土で有段となる裾部に擬凹線が13本施されている。6は周溝から出土しており、外面にはミガキが施されている。

10・11はP01からの出土である。10は弥生土器の甕である。有段口縁で外面には擬凹線は施されていない。他にも弥生土器破片が数点出土している。11は土師器皿である。1点のみの出土であるので恐らく流れ込みによるものと思われる。

ここからは中世の遺構より出土の遺物である。12はSB06のP2から出土の珠洲焼の壺である。底部のみの出土で、静止糸きり痕が確認できる。底径と体部の立ち上がりから考えて小壺に類すると思われる。13はSB06のP4から出土のAタイプの土師器皿である。磨耗が著しく、調整は不明である。外面の色調は橙色で、にぶい色がほとんどの他の土師器皿とは色調が異なる。

16・17はSI01・SI02出土の土師器皿である。何れもAタイプである。16は口縁端部を薄く仕上げ、口径が14cmと大型の類になる。17は口縁端部が丸みを帯びており、体部外面のナデが強い。厚手の仕上がりとなっている。

18はSI03出土の青磁碗である。底部のみの出土で、底部外面の釉は削り取られている。

19～21はSI04出土である。19は縄文土器の深鉢口縁である。外面には沈線と縄文が施されている。21は珠洲焼の鉢で、口縁端部を外傾させている。焼成が悪くやわらかい質感である。卸目は確認していない。

22はSI06出土のEタイプの土師器皿である。底部は薄く、体部と口縁は底部よりもやや厚めの作りとなっている。強くナデ調整を行っているため、体部が窪んでいる。

23～34はSE01出土の遺物である。23は古代須恵器の有台坏で、流れ込みによるものである。高台端

部には板状圧痕が確認できる。24～30は珠洲焼すり鉢・鉢で、24は口縁部で端部が外傾しており、一部卸目が確認できる。25も口縁部のみ出土のすり鉢で、口縁は外傾し、内端は爪状に細く仕上げている。27は口縁部のみの鉢で、口縁端部は外傾しており平らな作りとなっている。28は27同様口縁部のみで、器体はほぼ垂直に開くタイプのものと思われ、口縁端部は強いナデによって肥厚ぎみに仕上げている。29・30はすり鉢の底部で、29には卸目が13本、30には8本施されている。底部には静止糸きり痕を残す。31は越前焼すり鉢の底部で高台が高い作りである。33は加賀焼壺の口縁で、内面には工具痕が残り、径に歪みが見られる。34は瀬戸美濃焼の折縁皿口縁端部である。

35～50はSE02より出土のものである。35～37は珠洲焼すり鉢の底部である。35は底部からやや丸みを持たせて立ち上がる。卸目は6本で、胎土には海面骨針片が含まれる。38～49は土師器の皿である。38～43は底部が平底タイプで、口縁は7～8cmを測る。器高は低い。44は口縁部が外反し、体部下半には強くナデが施されている。45は底部が丸底である。46は口縁11.2cmの大皿である。47は口縁部が外反するタイプのものである。器高が2.2cmと他の土師皿よりも深身のつくりである。48は外面にミガキが施されている。中世の遺物として抽出しているが、形状や調整などを考えると時期が遡るかもしれない。49は深身タイプである。38～43・45～46・49はAタイプ、44・47はEタイプである。50は鉄製の笄で、形は扁平で両側を若干立ち上げている。ほとんどが欠損しているが、幅は異なる。

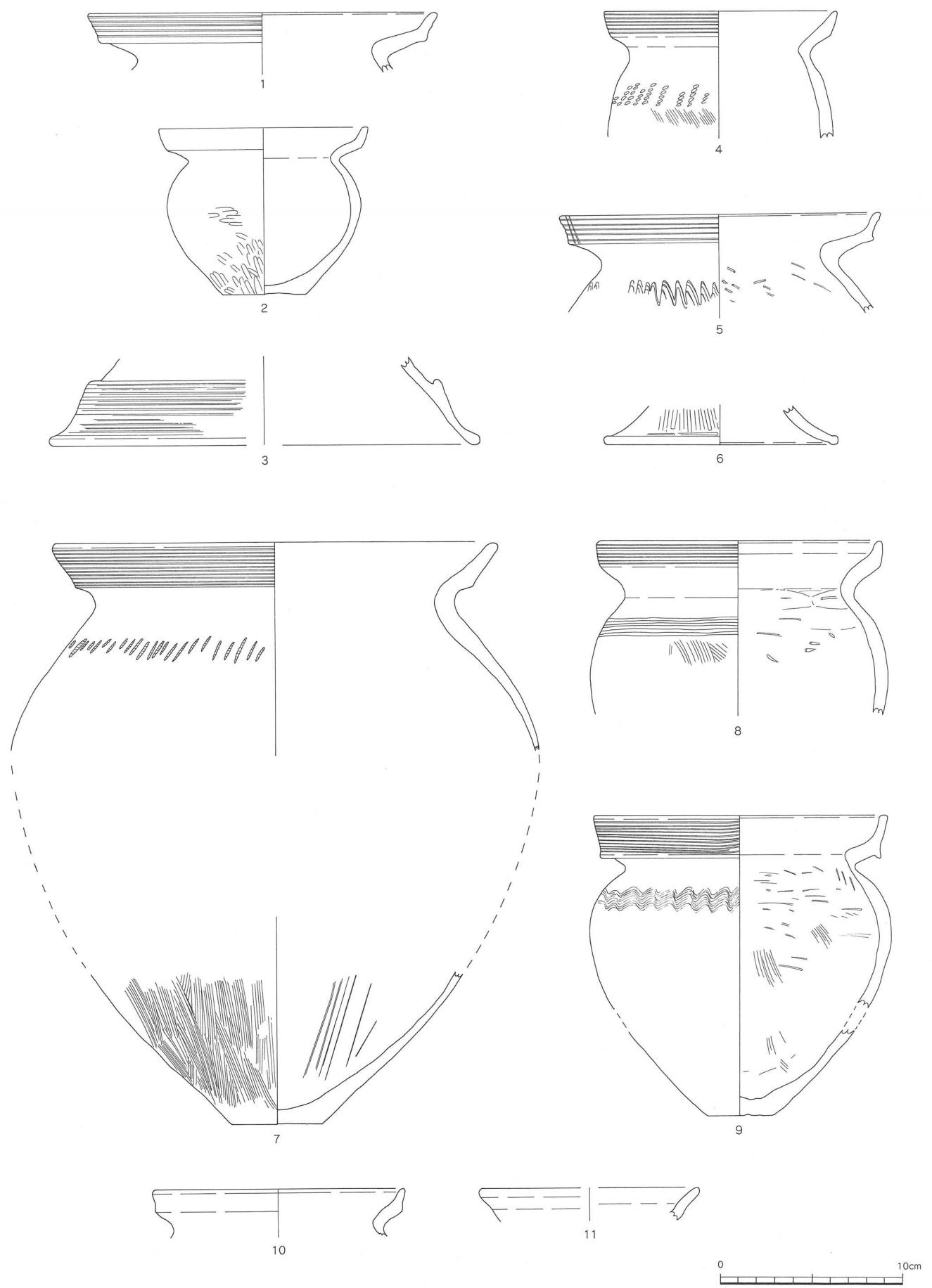
54はSD03出土の短刀である。茎部は残存しているが、刃の先端部は欠損している。

56～59は遺構面出土の遺物である。遺物は遺構面A1、A2の出土で、B1からの出土はない。58は凝灰岩質の砥石で、砥ぎ面には歪みと反りが見られる。反りの無い面には幅6mmほどの溝状の砥ぎ痕が残る。

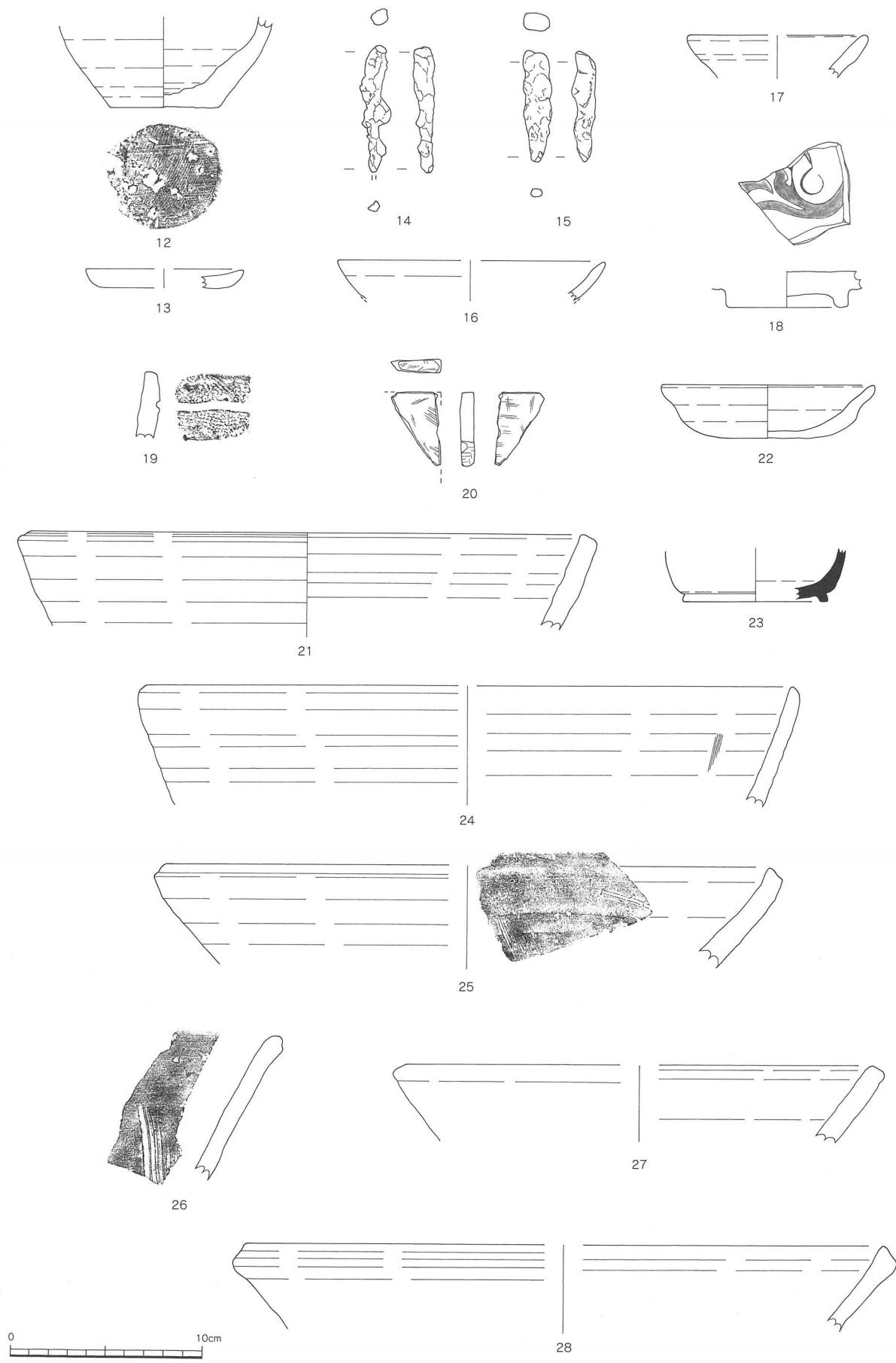
註

土器や陶磁器の分類・年代決定については以下の文献を参考にした。

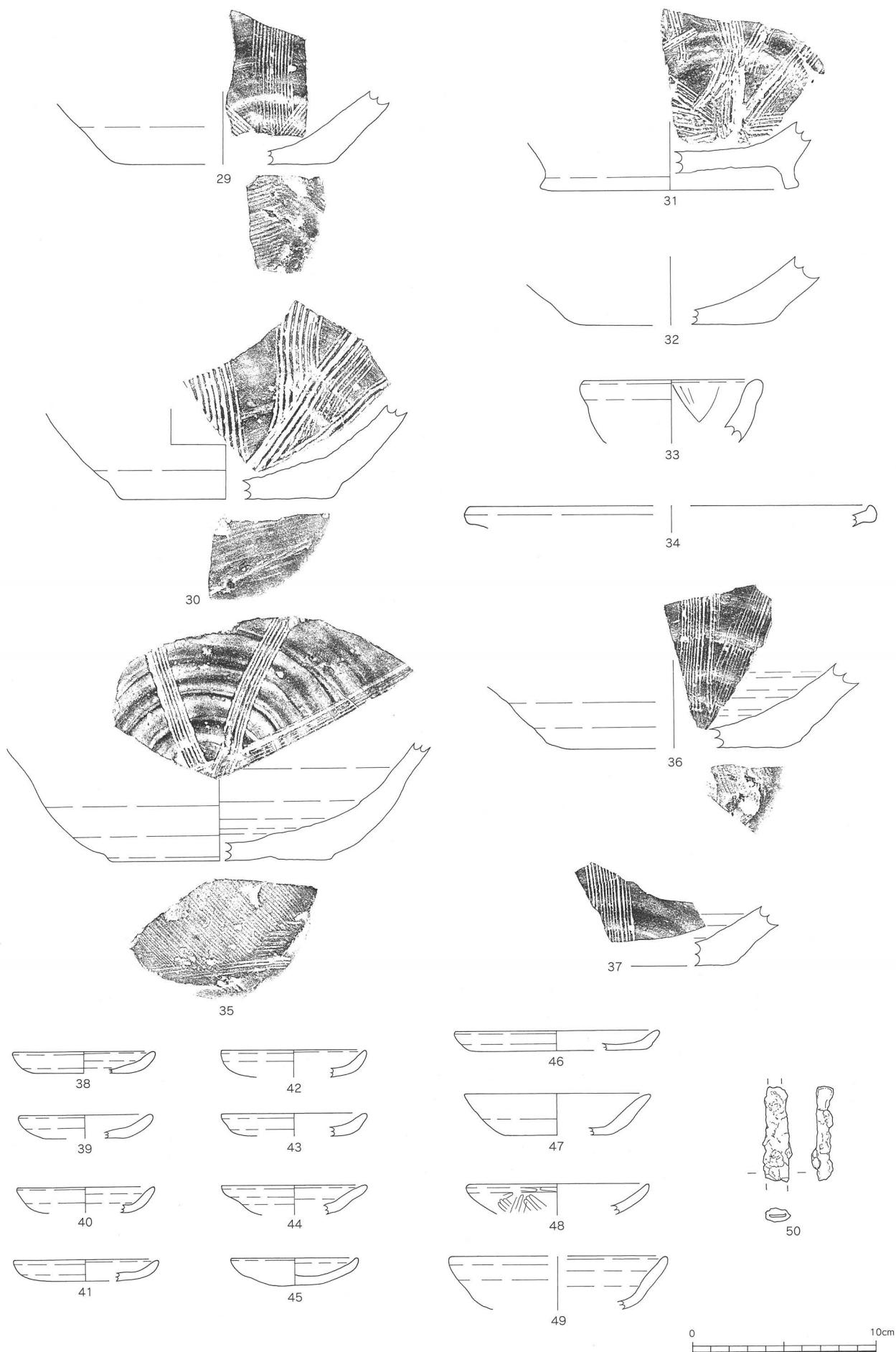
- 上田 秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究2』 日本貿易陶磁研究会
柿田 祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
楠 正勝 1996 「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡IV』 金沢市・金沢市教育委員会
藤田 邦雄 1997 「第2章 第2節 中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸』 北陸中世土器研究会編
吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
北陸中世考古学研究会 1998 「北陸中世の金属器一生産と流通ー」



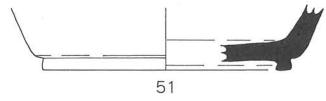
第17図 竪穴建物1(1~9)・P01(10・11) 出土遺物(S=1/3)



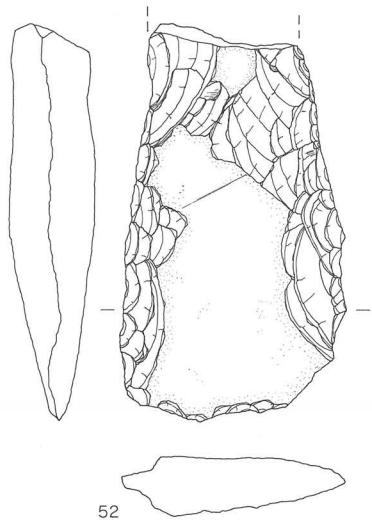
第18図 SB06(12・13)・SI01(14～16)・SI02(17)・SI03(18)・SI04(19～21)
SI06(22)・SE01(23～28) 出土遺物(S=1/3)



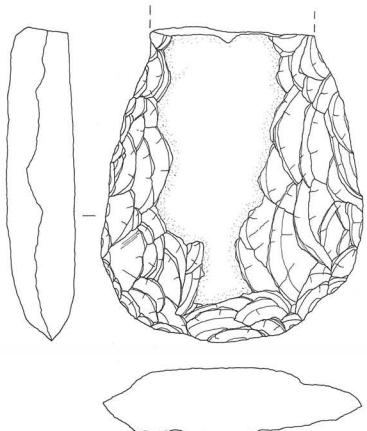
第19図 SE01(29~34)・SE02(35~50) 出土遺物(S=1/3)



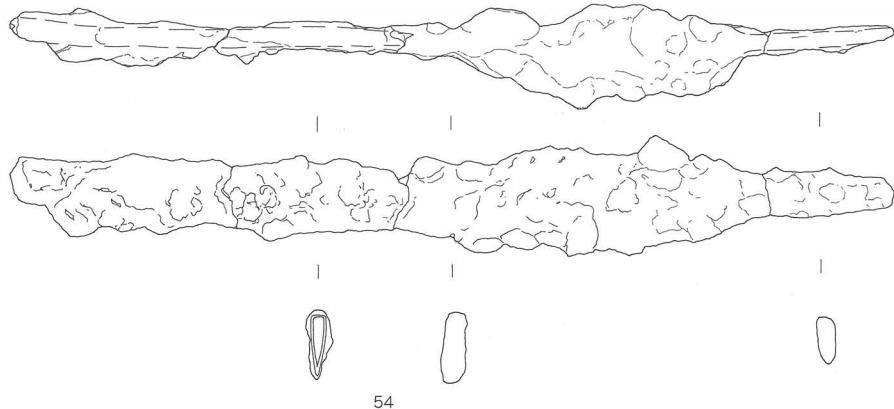
51



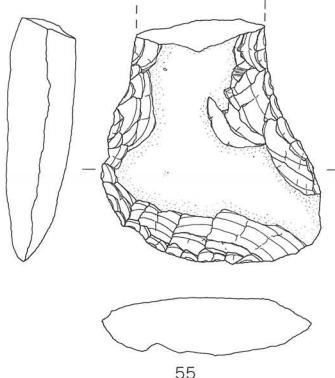
52



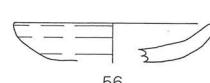
53



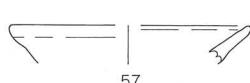
54



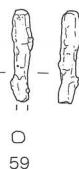
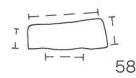
55



56



57



59



58



第20図 SD01(51)・SD03(52～54)・遺構面(55～59) 出土遺物(S=1/3)

第2表 遺物観察表

報告 No	遺構No	種類 器種	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	色調(外面)		石材 色調(内面) 重量(g)	残存率	調整(外面) 調整(内面)	胎土混和物	備考	出土地点 (旧番)	実測No
						にぶい黄橙色	口縁2/9			ナデ				
1	竪穴建物1	弥生土器 甕	196			にぶい黄橙色			口縁2/9	ナデ	砂礫S-2 赤色酸化粒	口縁外面に擬凹線5本	SI46	N-1
						にぶい黄橙色				ナデ				
2	竪穴建物1	弥生土器 小型甕	118	46	94	灰黄褐色 黒色		全体1/3	ナデ	砂礫S-2	体部外面一部剥離	SI46	N-2	
						にぶい黄橙色 褐灰色				ナデ、ミガキ				
3	竪穴建物1	弥生土器 高坏		(240)		浅黄橙色				ナデ	砂礫S-1、M-1	口縁外面に擬凹線13本	SI46	N-3
						浅黄橙色				ヨコナデ				
4	竪穴建物1 周溝	弥生土器 甕	130			黒褐色 にぶい褐色		口縁1/4		ナデ	砂礫S-1、M-1	口縁外面に擬凹線体部外面に刺突文	SI46 周溝	N-11
						にぶい黄褐色				ヨコナデ、刷毛目				
5	竪穴建物1 周溝	弥生土器 甕	180			にぶい黄橙色 黒褐色		口縁1/4		ナデ、ケズリのちナデ	砂礫S-1、M-1	口縁外面に擬凹線5本体部外面に櫛描文	SI46 周溝	N-10
						浅黄橙色				ナデ				
6	竪穴建物1 周溝	弥生土器 高坏		130		にぶい黄橙色		底部1/6		ミガキ	砂礫S-1 赤色酸化粒		SI46 周溝	N-8
						にぶい黄橙色				ナデ				
7	竪穴建物1 P1	弥生土器 甕	230 ~ 250			にぶい黄橙色 橙色		口縁 ほぼ完形		ナデ、刷毛目	砂礫S-1、M-3、L-1 赤色酸化粒	口縁外面に擬凹線体部外面に刺突文	SI46 内 SK54	N-9
						にぶい黄橙色 黑褐色				ナデ、工具痕				
8	竪穴建物1 P1	弥生土器 甕	160			にぶい橙・黄橙 黒褐		口縁8/9		ヨコナデ、刷毛目 ヨコナデ、ケズリ	砂礫S-1、M-2	口縁外面に擬凹線5本体部外面に櫛目	SI46 内 SK54	N-4・5・6・7
						にぶい橙・黄橙 褐灰				ヨコナデ				
9	竪穴建物1 P1	弥生土器 甕	164			にぶい黄褐色 暗褐色		口縁1/3 底部1/2		ヨコナデ	砂礫S-1、M-2	口縁外面に擬凹線13本体部外面に櫛描文、すす付着	SI46 内 SK54	N-12・13・14
						にぶい黄褐色 橙色				ヨコナデ、ケズリ				
10	P01	土師器 皿	(124)			灰黄褐色		口縁1/9		ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化粒、石英		P90	N-56
						灰黄褐色				ヨコナデ				
11	P01	弥生土器 甕	142			にぶい黄褐・黄橙色		口縁1/3		ヨコナデ	砂礫S-1、M-1		P90	N-15・16・17・18
						にぶい黄褐・黄橙色				ヨコナデ、ナデ				
12	SB06 P2	珠洲焼 壺	56			灰色		底部5/6		ロクロナデ	砂礫S-1	静止糸切り痕	P149	N-63
						灰色 オリーブ黒色				ロクロナデ				
13	SB06 P4	土師器 皿	(82)	(68)	(10)	橙色		口縁1/9		磨耗のため調整不明			P147	N-62
						橙色				磨耗のため調整不明				
14	SI01	鉄製品 釘	59	15	12								SK01	N-26
						11.7								
15	SI01	鉄製品 釘	77	16.5	12								SK01	N-25
						7.1								
16	SI01	土師器 皿	(140)					小片		磨耗のため調整不明 磨耗のため調整不明	砂礫S-1		SK01	N-27
										磨耗のため調整不明 磨耗のため調整不明				
17	SI02	土師器 皿	(96)			にぶい黄橙色		商品		磨耗のため調整不明	砂礫S-1		SK10	N-24
						にぶい橙色				ナデ				
18	SI03	青磁 碗	64			灰オリーブ色 黄褐色		底部1/4			茶色粒		SK08	N-28
						灰オリーブ色								
19	SI04	縄文土器 深鉢				にぶい黄褐色		小片		縄文、沈線 ナデ	砂礫S-2 石英		SK07	N-20
						にぶい黄橙色				ナデ				
20	SI04	石製品 砥石	39	27	7.5								SK07	N-21
						7.2								
21	SI04	珠洲焼 鉢	302			黄灰色		口縁1/9		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-2	焼成不良	SK07	N-19
						灰黄色				ロクロナデ				
22	SI06	土師器 皿	112	52	28	にぶい黄橙色		全体1/3		ヨコナデ	砂礫S-2		SK06	N-22・23・65
						にぶい黄橙色				ヨコナデ				
23	SE01	須恵器 有台坏		76		灰色		高台部 1/4		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-2	高台部に板状圧痕あり	SE02	N-34
						灰色				ロクロナデ				
24	SE01	珠洲焼 すり鉢	(346)			黄灰色		口縁1/12		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-2		SE02	N-29
						灰色				ロクロナデ				
25	SE01	珠洲焼 すり鉢	(328)			灰色		口縁1/18		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-1、M-1		SE02	N-33
						灰色				ロクロナデ				
26	SE01	珠洲焼 すり鉢				オリーブ黒色		小片		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-1		SE02	N-36
						灰色				ロクロナデ				
27	SE01	鉢	(258)			にぶい黄橙色 褐灰色		口縁1/18		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-1、M-1	焼成不良	SE02	N-40
						灰黄褐色				ロクロナデ				
28	SE01	珠洲焼 鉢	(348)			灰色		小片		ロクロナデ ロクロナデ	砂礫S-1			

最大長 最大幅 最大厚

報告 No	遺構No	種類 器種	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	色調(外面) 石材		残存率	調整(外面) 調整(内面)	胎土混和物	備考	出土地点 (旧番)	実測No
						色調(内面)	重量(g)						
33	SE01	加賀焼 壺	(100)			にぶい褐色		口縁1/3	ロクロナデ	砂礫S-1	内面に降灰 工具痕あり 口縁に歪みあり	SE02	N-38
						灰褐色	灰黄色		ロクロナデ				
34	SE01	瀬戸美濃 折線皿	(226)			オリーブ黄色		小片		茶色粒	灰釉	SE02	N-35
						オリーブ黄色							
35	SE02	珠洲焼 すり鉢	124			灰黄色 黄灰色		底部1/3	ロクロナデ	砂礫S-1、M-1	卸目6本 静止糸切り痕	SE04	N-41
						灰色			ロクロナデ				
36	SE02	珠洲焼 すり鉢	(138)			黄灰色		小片	ロクロナデ	砂礫S-1	静止糸切り痕	SE04	N-42
						黄灰色			ロクロナデ				
37	SE02	珠洲焼 すり鉢				灰色		小片	ロクロナデ	砂礫S-1、M-1		SE04	N-43
						灰色			ロクロナデ				
38	SE02	土師器 皿	79	54	12	にぶい黄橙色		全体1/7	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-46
						にぶい黄橙色			ナデ				
39	SE02	土師器 皿	74			にぶい黄橙色		全体1/9	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-53
						にぶい黄橙色			磨耗のため調整不明				
40	SE02	土師器 皿	76			にぶい黄橙色		全体1/5	磨耗のため調整不明	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-50
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
41	SE02	土師器 皿	80	(50~60)	(9~12)	にぶい橙色		全体1/3	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-45
						にぶい橙色			ヨコナデ				
42	SE02	土師器 皿	80			にぶい黄橙色		全体1/4	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-48
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
43	SE02	土師器 皿	80			にぶい黄橙色		全体1/7	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒、石英		SE04	N-54
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
44	SE02	土師器 皿	80			にぶい黄橙色		全体1/7	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-52
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
45	SE02	土師器 皿	70	30	15	にぶい橙色 褐灰色		全体1/4	ナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-44
						にぶい橙色			ナデ				
46	SE02	土師器 皿	112	96	11	にぶい橙色		全体1/7	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒、石英		SE04	N-55
						にぶい橙色			ヨコナデ				
47	SE02	土師器 皿	102	58	22	にぶい褐色		口縁1/8	ナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-47
						にぶい黄橙色			磨耗のため調整不明				
48	SE02	土師器 皿	100			橙色		口縁1/9	ミガキ	砂礫S-1		SE04	N-49
						にぶい橙色			ナデ				
49	SE02	土師器 皿	(120)			にぶい黄橙色		口縁1/18	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		SE04	N-51
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
50	SE02	鉄製品 笄	53	117	13							SE04	N-57
						8.1							
51	SD01	須恵器 有台坏		98		灰色		底部2/9	ロクロナデ	砂礫S-1		SD52	N-58
						灰色			ロクロナデ				
52	SD03	石製品 打製石斧	158	89	33			520				SD139	N-60
						495							
53	SD03	石製品 打製石斧	125	104	27			300				SD139	N-59
						250							
54	SD03	鉄製品 短刀	349	48	42							SD139	N-61・68
						68.9							
55	P02	石製品 石斧	107	86	27			250				P248	N-64
						250							
56	包含層	土師器 皿	80		(14~20)	にぶい黄橙色		口縁1/4	ナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		包含層	N-70
						にぶい黄橙色			ナデ				
57	包含層	土師器 皿	(96)			にぶい黄橙色		口縁1/9	ヨコナデ	砂礫S-1、赤色酸化 粒		包含層	N-67
						にぶい黄橙色			ヨコナデ				
58	包含層	石製品 砥石	97	33	15			68.9				包含層	N-66
						68.9							
59	包含層	鉄製品 釘	37	8	8			2.2				包含層	N-71
						2.2							

第4章 総括

今回の発掘調査では弥生時代・中世の遺構・遺物を確認した。

弥生時代の遺構は、後期後半の竪穴建物1棟を確認した。調査範囲が狭小で、確認できたものは建物跡1棟のみの検出であったが、周辺の発掘調査によって、当該期に位置づけられる竪穴建物数棟が確認されていることから、集落の存在が確認できる。出土した遺物は甕などの日常における使用頻度の高い土器が多く、供献目的の高壙などは数点の出土であった。

中世では掘立柱建物7棟、竪穴状遺構6基、井戸2基、溝を確認した。

確認された中世の遺構は、調査区中央を走るSD03より西側で建物・竪穴状遺構・井戸などの遺構が集中して確認できた。西側で確認された掘立柱建物や竪穴状遺構は同じ場所或いはその付近で造り替えが行われていることが分かっているが、詳細な遺構の前後関係などについては不明な点もある。井戸については、確認された2基は隣接した箇所で確認されており、同時期の井戸が近接して2基存在していたとは考えにくく、1基が廃絶したのち造り替えられたものと考えられる。SD03より東側では掘立柱建物が3棟(SB05・06・07)確認されているが、西側に比べると遺構の密度は低い。この掘立柱建物3棟のうちSB05・06については同じ箇所で造り替えが行われている。また、建物の柱穴は、SB01～04とSB05～07の規模が異なることから、SD03を境に時期が異なる可能性がある。

出土した遺物については総体的には土師器皿が多く、油煤痕の残るものは1点もなかった。国産陶器では珠洲焼が破片点数29点で、越前焼3点・瀬戸美濃焼は2点のみの出土であった。青磁については2点、白磁に至っては1点の出土もなかった。器種は日常容器がほとんどで、内訳をみるとすり鉢が多く、甕、壺は少ない傾向であった。集落が機能していた時期は14世紀初頭～中頃であると推測する。

今回の調査範囲は狭小であり、正確な遺跡の性格について判断することは難しいが、当地周辺における調査から、弥生時代・中世の遺構の密度が高いことが分かっていることから、両時期における集落の中心地であったと考えられる。



遺構完堀状況(西から)



SB06(P2) 珠洲焼壺出土状況(北から)



豊穴建物1完堀状況(北東から)



豊穴建物1・SI01~06・SE01・02完堀状況(南西から)



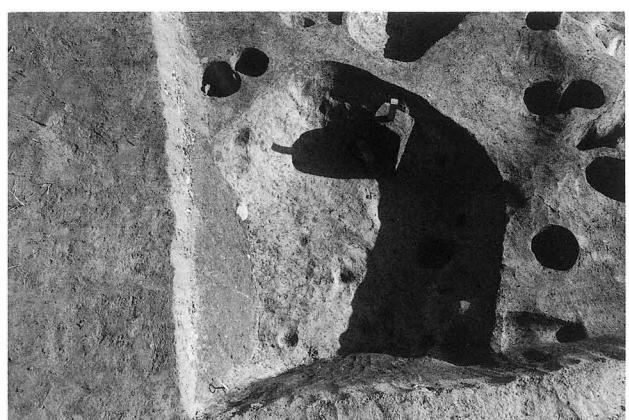
豊穴建物1弥生土器出土状況(東から)



SI02~06完堀状況(北から)

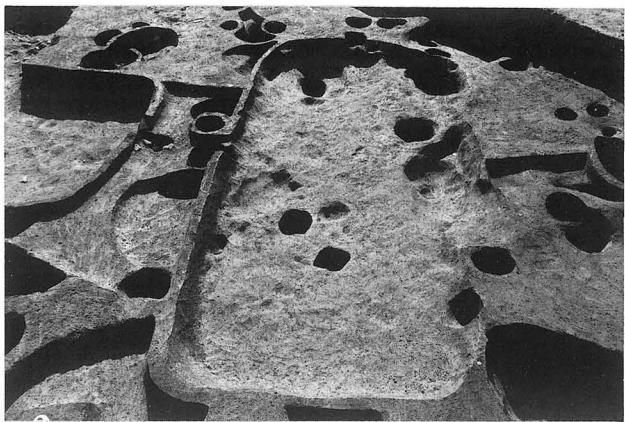


SB05・SB06完堀状況(東から)



SI01完堀状況(西から)

写真図版 2



SI02 完堀状況(北から)



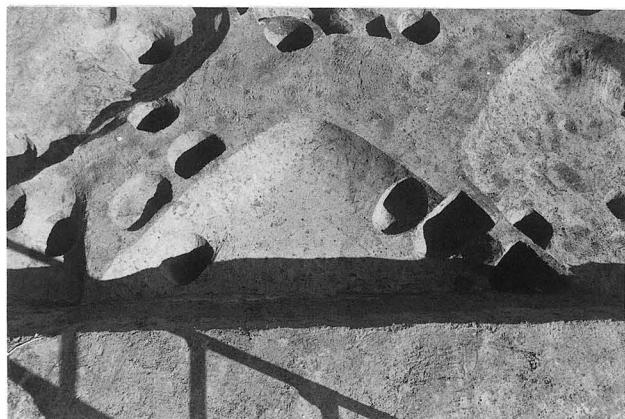
SE01 土層断面(南から)



SI03・SI04 完堀状況(東から)



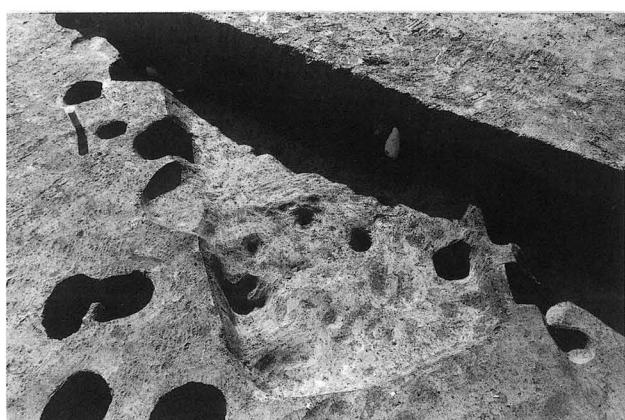
SE02 土層断面(南西から)



SI05 完堀状況(南西から)



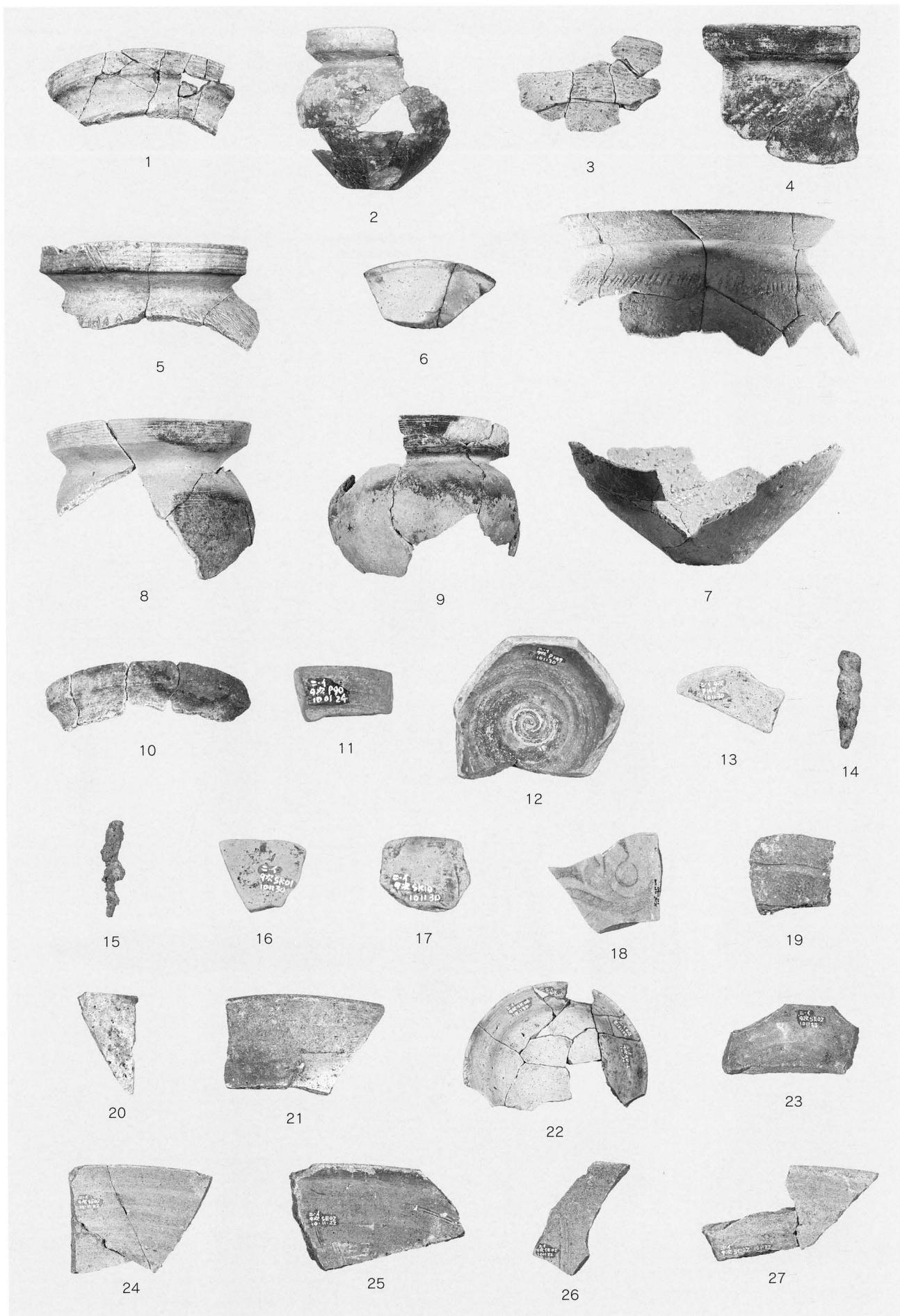
SD02・SD03 完堀状況(南から)



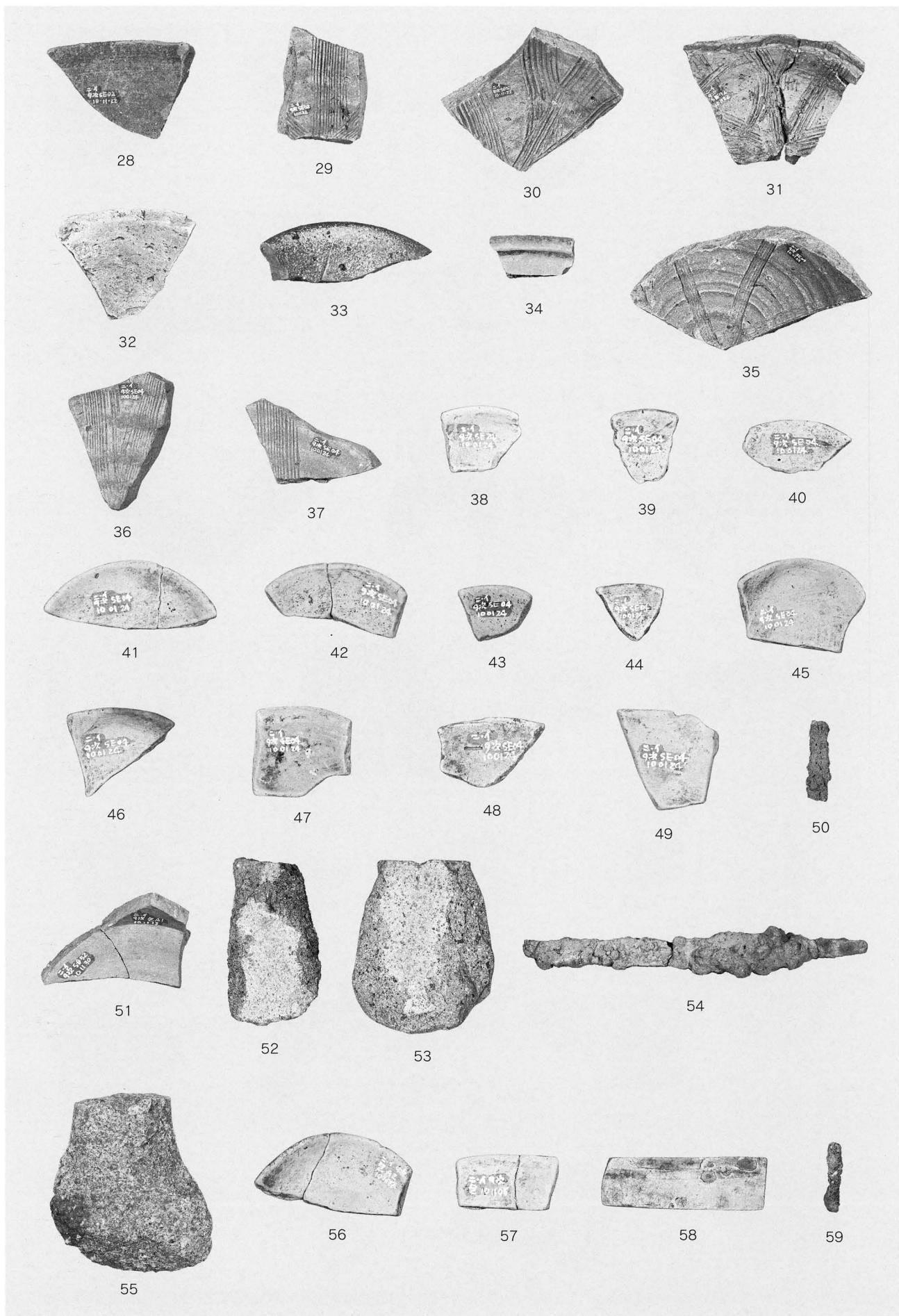
SI06 完堀状況(北から)



SE01・SE02 完堀状況(北東から)



写真図版 4



報告書抄録

二日市イシバチ遺跡

野々市町町営住宅等建設に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成23年3月31日
発行者 野々市町教育委員会
〒921-8510
石川県石川郡野々市町字三納18街区1
電話 076-227-6122
bunka@town.nonoichi.lg.jp
印刷者 (有)アサヒヤ印刷
